

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.28
2025.3

関東学院創立記念式典



140th KANTO GAKUIN

関東学院六浦こども園
設立10周年記念式典



日時：2024年1月27日（土）10時～
場所：関東学院大学八景キャンパス
SUV館 ベンネットホール

関東学院六浦こども園の10年



目次

はじめに	2
特集1 関東学院創立140周年記念事業	
創立140周年記念式典（記念礼拝・メッセージ）	
約束されたものを仰ぎ見つつ	3
創立140周年記念講演会	
キリスト教学校として大切にしているもの、大切にすべきこと	6
座談会—創立記念講演会を受けて—	17
特集2 関東学院150周年に向けて	
関東学院ボランティアセンターの設立に向けて	27
六浦こども園設立10周年記念事業	
これまでの10年、そしてこれから	28
編集後記	32

はじめに

関東学院 学院長 松田 和憲

皆様に『関東学院学院史資料室ニュース・レター』No.28をお届けできること、大変嬉しく思います。

前号までは、数回に亘って、それぞれの周年記念の年次に併せて、各学校・各園の校長先生、園長先生に、発足の草創期から今日に至るまでの歴史的経緯について、苦労談、エピソードを交えて、子細にしたためていただきました。特に、今年度は140周年の年と言うことで、125年周年から150周年に向けての歴史記述をどのように纏め、記録として後世に残すかという作業の必要性を実感しておりましたので、こうした先生方の息遣いと、園児・児童・生徒に対する思い遣りのこもった歴史叙述は、第一次史料として大変有益な記録になるものと感じております。執筆して下さった方々に、この紙面をお借りしてお礼申し上げたいと思います。

さて、再々申し上げておりますように、今年は、関東学院創立140周年の記念の年で、法人の総務課、政策推進課、学院史資料室事務室などの皆さんの協力を得て、小規模な内輪の集いであっても、何らかの意味を持たせた記念式典行事を催したいと切に願い、ほぼ1年かけて準備してきました。そして、去る10月12日(土)、八景キャンパス・ベンネットホールにおいて、創立記念礼拝、永年勤続表彰式に続いて、大変お忙しい中、時間を割いてくださった立教学院院長・立教大学総長の西原廉太先生に、「キリスト教学校として大

切にしているもの、大切にすべきこと」と題する基調講演を頂き、一同感銘を受けました。そのあと、両中高のダンス部のパフォーマンス、そして、ゴスペル・コンサートと、盛りだくさんのプログラムでしたが、250名を超える参加者が与えられ、その後の懇親会にも150名ほどが残ってくださいり、成功裏に終わったこと感謝でございました。

そんな訳ですので、今号は、この創立140周年記念号と銘打って、創立記念礼拝における松田学院長のメッセージの全文、西原先生のご講演の全文を掲載させて頂きました。さらに、西原先生の講演を受けて、数日後に開催した、6人の教師たちによる「座談会」も全文掲載させて頂きました。敢えて申し上げたいのですが、この文字起こしの大変な作業については、学院史資料室事務室の逸見義顕氏が担当してくださいました。お仕事とはいえ、忍耐と練達をもって作業に当たってくださったことを感謝いたします。

今号全体を鳥瞰する時、創立140周年の節目に際し、いささか手前味噌ですが、それに相応しい記録を残すことができたかなと思っています。併せて、わたしが他の冊子等で創立140年を期して書いてあるものに目を通していただければ幸いです。

お一人お一人の上に、主の祝福と守りがありますように！



創立140周年記念式典（記念礼拝・メッセージ）

約束されたものを仰ぎ見つつ（ヘブライ人への手紙第11章1節、13節-16節）

日時：2024年10月12日（土）

場所：大学 金沢八景キャンパス

学院長 松田 和憲

本日、学院創立140周年記念式典を挙行できますこと、感謝いたします。共に創立の時から今日までの変わらない神の恵み、導きに感謝し、また関東学院の教育のわざのために尽力された多くの先達、関係者の皆さんのご支援・ご協力を覚え、さらには、150周年に向けて思いを新たにする「旅立ちの時」にしたいと願っています。

本日ご一緒に学びたい聖書は、「ヘブル書」と呼ばれ、新約聖書の中でも難解な手紙ですが、1世紀後半、ローマ皇帝の迫害に苦しみ、信仰的にも弱り、意気消沈している人々に書かれた手紙で、内容的にも豊かで、現代の私たちにも励ましを与える手紙です。11章1節で「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認すること」だと語り、続いて、創世記の時代から信仰に生きた人々、アブラハム、イサク、ヤコブ、そして、モーセ、ダビデ等の名を連ねています。今日はその中で「信仰の父」と呼ばれた、アブラハムの生き方を学んでみたいと思います。

アブラハムの一族は父の代まで、メソポタミヤ文明の発祥地、カルデアのウルに住み、その後ユーフラテス川を北西に進み、パダンアラムのハランにやってきました（創11：31）。父はそこで死に、アブラハムは族長となり、主から「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて私が示す地に行きなさい」との言葉を聞きます。この命令は彼に対し厳しい決断を迫り、安定した生活に決別することを促すものでしたが、彼は主から旅立ちの命令を聴き、主の祝福の言葉を信じ、ハランの地を旅立ったのです。

アブラハムが一族の長（おさ）として、生活の根拠も捨て見知らぬ土地に旅立つことは大きな冒険であり、表現できないほどの不安に駆られたに違いありません。ヘブル書11章8節では「アブラハムは、主の言葉に服従し、行く先も知らずに出発した」と記しています。「行く先も知らずに旅立つ」ことは、一見無定見で場当たり的態度と見る向きもありますが、聖書は、ア布拉ハムの取った態度の中に信仰者としての眞の生き方があると語っています。

フランス文学者・森有正氏は、アブラハムが「行く先も知らずに旅立った」姿勢を評し、彼は「冒険する心」を持っていたと語ります。日本語で「冒険」と言えば、「危険を冒すこと、成功するか定かでないことを敢えて行うこと」、向こう見ずで無茶なことを行うと言ったニュアンスで考えられがちですが、元々、英語の venture、Adventure、フランス語のアバンチュールとも同じ語源で、「危険を冒す」意味の他に、「やつてくる」とか「思いがけないことが起こる」「新しく起こることに期待し信頼して生きる」という意味でも用いられています。キリストの誕生を待ち望む「アドヴェント」も同じ語源で、「期待して待つ」という意味が含まれています。

森有正氏は、「冒険」に対立する反語は「同化」、すなわち「自分のものにすること」「自分に同化する」ことだと語っています。そうした自己中心的で、自分を変えようとしない生き方こそが「冒険」の反対語の「同化」だと言うのです。森氏にとって「冒険」とは、南極探検とかエヴェレスト登頂など、未知の世界に危険を冒して足を踏み入れることだという意味の他に、「新たなものに触ることで自分も新しくされ、心を開く」と言うことを意味しており、アブラハムが神の召しに従い「行く先も知らずに出て行く」姿の背後に「冒険する心」があったことを森氏は見逃しませんでした。それならば、アブラハムは、なぜ「行く先も知らずに出ていくこと」ができたのでしょうか。彼は楽天家で「何とかなるさ」と思うことができたからでしょうか。いや、そうではありませんでした。彼は誰よりも民を愛し、その行く手に対して長として並々ならぬ关心を抱いていましたが、心の一番深い処で「行き先」は自分自身が決めるのではなく、神ご自身が道を示してくださいことに信頼を寄せていたからではないかと思います。信仰とはある意味で自分の立てた計画を手放して、主なる神の導きに一切を委ねることであると言えましょう。

さて、こうしたアブラハムのような決断を迫られたのは旧約時代の遙か昔のことですが、現代の私たちとは無縁なことでしょうか。そうは思いません。創立記念に

あたり、学院として忘れてはならない事例を挙げれば、100年ほど前の1919年4月、三春台の丘に「中学校」を創設しようとした際、学校関係者にとって大きな決断を迫られることがありました。当時の日本政府は天皇制を全面に打ち出し、キリスト教教育抑圧のため「文部省訓令第12号」を発令したのです、それは「宗教教育、特に礼拝、聖書の授業、キリスト教の関連行事の一切をしてはならぬ」との訓令で、殆どのキリスト教学校は窮地に立たされたのです。

元院長・坂田祐先生の著書『新編 恩寵の生涯』「関東学院建学の精神 (p.481-487)」でこう記しています。「〔前略〕学院を横浜に創立するときに、キリスト教を表面に掲げては学校が発展しないから、中学校としてのすべての特典を有する普通の中学校としてやった方がよろしいではないかとの意見がありました。しかし私は、普通の中学校としての特典が得られなくとも正面に掲げてやらなければ眞の教育ができると主張し、関東学院中学校でなく中学関東学院として創立したのであります。〔中略〕不利に甘んじてキリスト教を正々堂々と掲げ、聖書を道徳の根底として教えて来たのであります。」このように、坂田先生は事実について淡々と記されていますが、その背後で、学校を率いるリーダーとしてどんな葛藤、苦しみがあったことか、今更のように思われています。かくして、1919年に不利益を被ることも辞さず、無認可の各種学校の道を選び取り「中学関東学院」としてスタートしたのです。日本キリスト教史の第一人者・土肥昭夫氏は、当時、訓令第12号の圧力に屈して廃校した学校もあれば、キリスト教学校としての看板を取り下げるやつもあったと記しています。その中で我が関東学院の指導者の諸先生方が「ブレル」ことなく、学院として取るべき大切な道を選択されたことは歴史上、特筆すべき事柄であったと思います。

私は、坂田先生の言葉を読んで、当時の諸先生方は「冒険する心」を持っておられ、「行く先を知らずに」出ていかれたと信じています。開校の三か月前、神奈川県・有吉知事の名で「私立中学関東学院」設立が認可された際の記録に生徒定員600名と記していますが、その時、600名もの生徒を迎えて、政府の訓令に従って特典を得ることで、心置きなく教育事業を行った方が良いとの声が上がったに違いありません。勿論、時代的状況は違いますが、もし私が教学の責任者として、文部省の言うことを聞いて、しっかり恩恵を受けた方が良いのでは、との囁きを耳元で聞いたなら、それに屈することなく、毅然とした態度を取ることができたであろうか、と自問している処です。

ここまで私たちは、創立140周年記念に当たり、過

去の先達の信仰的態度に敬意を払ってきました。それを踏まえて留意したいことは、創立150周年に向けて、揺れ動く社会の目まぐるしい変化に動じることなく、また目先の損得に囚われずに、学院としての揺るがない一本筋の通った教育理念、建学の精神に立ち続ける必要性を強く感じています。なぜならば、21世紀を迎えた今もなお、教育の現場においては、常に判断、決断を迫られるような事柄が私たちの前に置かれているからです。

その主なものを2～3挙げるならば、2006年には「教育基本法の全面改訂（これは1947年に公布された基本法の改悪）」がなされ、教育界に大きな波紋を投げかけました。そして2011年、文科省による「道徳の教科化」、それは、私立・公立を問わず、授業の中に「道徳」の教科を導入すべしということで、有無を言わせず、道徳の教科書が我々の小中学校にも送り届けられました。「聖書」こそが道徳に勝る「教科書」だと主張するキリスト教学校にとっては大きな問題でした。そして2025年から文科省通達として私学法の全面改訂を余儀なくされ、多くのキリスト教学校では戦々恐々としています。一連の事柄は決して容易に受け入れられるものではなく、何が問題か、いかに対応すべきか、慎重に検証すべきものばかりです。キリスト教学校として何を守っていくべきか、かつての先達が立ち続けた場所に、私たちは過たず立ち続けられるか、日々問われているような気がしてなりません。

我が学院の「道しるべ」は何かと問えば、どなたも校訓「人になれ 奉仕せよ」だと答えるでしょう。私は数あるキリスト教学校の校訓の中でも、校訓「人になれ 奉仕せよ」は極めて優れた校訓だと感じています。その理由が色々ある中で一つだけ挙げれば、坂田先生が数年後に「人になれ 奉仕せよ」に併せて、「その土台はイエス・キリスト也」と書いておられたことがあります。それには、坂田先生が、この校訓が独り歩きしないように、また安っぽいヒューマニズムに陥らないようにとの思いが込められていたと思います。それでは「キリストを土台とする生き方」とはどんな生き方を意味するのか、また、具体的に学生・生徒にいかに伝えれば良いのでしょうか。かつての宣教師ディローフ先生ご夫妻の母校、シカゴのJudson Collegeと、工学部・建築学科との提携で、数名の学生を大学院に送り、学位取得後、二人の学生が帰国して研究室を尋ねてくれた時の話ですが、Deanとの面談で、「君たちの信仰は何か」と問われた時に、彼らが率直に答えたことを話してくれました。「自分はクリスチヤンではありませんが、大学に入って、初めて「キリスト教学」の授業で聖書に触れ、その深い世界

観、人間理解を学ぶことができ、これを自分の人生の土台として学び続けていきたいと思います。」と答えたなら、Deanは大変喜んでくれたと語ってくれました。

キリスト教学校の使命（ミッション）は学生、生徒をキリスト教信仰に導くと言うより、今まで触れたことのなかった聖書の普遍的な真理、ものの考え方、人間観、倫理観に触れ、かつ学ぶことによって、それを土台に学生・生徒各自が自らの人生を築き上げる手助けをすることではないでしょうか。

最後に、ヘブル書の読者も励ましたであろう言葉を皆様に贈り、創立140周年記念のメッセージとさせて頂きます。ヘブル書12章1-2節（口語訳）「こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、絡みつく罪とをかなぐり捨てて、私たちの参加すべき競争を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。」



創立140周年記念講演会

キリスト教学校として大切にしているもの、 大切にすべきこと

立教学院院長・立教大学総長
キリスト教学校教育同盟理事長 西原 廉太

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、私ですね、立教大学の総長、また立教学院の院長をしております。またご紹介いただきましたとおり、関東学院も多大なるご協力をいたいでおります、キリスト教学校教育同盟、これは日本のプロテスタント系のミッション系の約120の学校法人が加盟しております団体でございますけれども、その理事長もさせていただいております。まずは、関東学院の創立140周年ということで、誠におめでとうございます。またそのような大切な記念式典にお招きいただきまして、心から感謝申し上げたいと思います。また御礼ということをございますと、今年の6月に、キリスト教学校教育同盟の定時総会を行いましたけれども、会場に、関東学院大学の関内キャンパス、新しい、素晴らしいキャンパスですね、このテンネー記念ホールをお借りいたしまして、素晴らしい定時総会を行うことができました。ご配慮いただきました松田学院長はじめ、皆様には様々なバックアップを含めて、ご尽力いただきましたことを、この場をお借りしまして、あらためて感謝を申し上げたいと思います。私はこの金沢八景キャンパスには何度も越させていただきまして、こちらのベンネットホール、以前から素晴らしいと思っておりましたが、関内キャンパスですか、これはもうそれにもまして新しく近代的で、感動いたしました。地上17階ということで、全国のキリスト教学校の指導者たちは、一同口をあんぐりとしまして、驚いて、よくこんな素晴らしい建物が建てられた、本当に素晴らしいな、中には「いくらかかったのだろう」と聞きたがっていた理事長・学長もいましたけれども、本当に素晴らしいキャンパスが関内にも誕生されたことも、改めてお祝いを申し上げたいと思います。

今日は、私をご指名いただきまして、「キリスト教学校として大切にしているもの、大切にすべきこと」というタイトルで、1時間ばかりですね、お話しをさせていただく機会を与えていただきましたけれども、私の専門ですね、先ほどご紹介いただきましたけれども「アングリカニズム」というものですね。これは「アングリカン」というのは「聖公会の」という意味

なのですけれども、聖公会というのは英國の国教会にルーツを持つ教会のことを日本やアジアでは呼んでおりますけれども、その聖公会の神学のことをアングリカニズムと呼んでおります。それが専門なのでございますけれども、なので、今日のお話しの中心は、その聖公会の神学の観点から、私が所属しております立教などで大切に考えていることなど、少しお話しできればと思いますけれども、その点ご容赦いただきたいと思います。

さて、関東学院140年、おめでとうございます。関東学院の源流は、皆さんご承知のように、今から140年前の「横浜バプテスト神学校」までさかのぼるということですけれども、アメリカのミッショナリー・ユニオンから派遣された宣教師ですが、アルバート・アーノルド・ベンネット、まさにこのホールの名前ですが、そのベンネット先生がですね、今から140年前の1884年に、横浜の山手に初代校長として学校を創られた、それが皆様方の関東学院のルーツである、ということだと思います。そしてその後ですね、こちらがそのベンネット先生の写真（→写真1）ですね。そしてその後ですね、1895年に普通教育を教授する学校



写真1



写真2

を、築地の居留地に設立されました。それが「東京中学院」と呼ばれていたということでございます。実は、私共の立教学院もですね、ちょうど今年創立150周年の年でございまして、150年記念式典が様々な関係者の方にお越しいただきまして、感謝申し上げたいと思いますけれども、150年前の同じ東京築地の居留地にですね、立教学校を造ったのが始まりでございますので、その意味では、立教や関東学院だけではなくて、その他のプロテスタントのミッション系の学校がかなり同じ歴史を持っておりますけれども、築地時代はですね、正にお隣同志で、姉妹関係のようにして学び舎が造り上げられたという、大切にしたい歴史でございます。そしてこの東京中学院の初代校長には、渡瀬寅次郎先生が着任されました。私は渡瀬寅次郎先生というのは、大変すばらしい方だったと、尊敬申し上げるものでございますが、中でも渡瀬寅次郎先生が遺された言葉ですね、これは「学校は工場ではない」という精神を示されておられまして、まさにこれがキリスト教精神に基づく人格教育の宣言だったろう、そんな風に思う訳で、深い感銘を受ける次第でございます。こちら、左が渡瀬寅次郎先生、また右の写真は東京中学院の写真（→写真2）で合っていますでしょうか。そしてですね、東京中学院は、1899年に牛込に移転をされまして、校名を「東京学院」と改められました。そしてさらに、チャールズ・バックリー・テンネー先生ですね、1919年に学院の発展を願われまして、東京学院中等部を発展的に閉校され、横浜の地に新たにキリスト教教育に徹するボーイズスクールとして「私立中学関東学院」を設立なさったのでございます。こちら（→写真3）がテンネー先生で、すばらしい宗教指導者でございますが、そしてこのテンネー先生によって初代院長に任命されましたのが、坂田祐先生でございました。この坂田祐先生は、第1回入学式で「人になれ」「奉仕せよ」と告示をされた、まさにこの言葉が、現在に至るまで、関東学院のスクールモットー・建学の精神・校訓として、今まで受け継がれているものでございます。先ほど職員の方々と名刺の交換をさせていただきましたけれども、名刺に

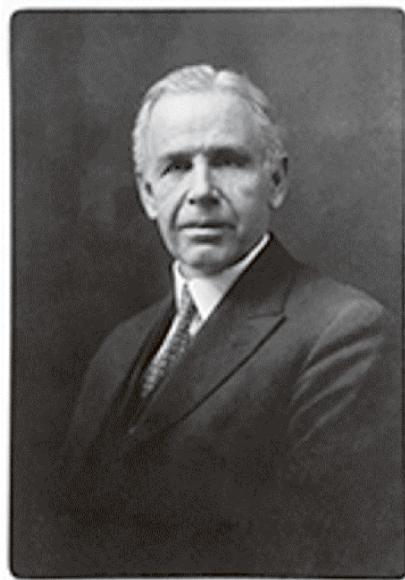


写真3

ちゃんと「人になれ 奉仕せよ」という言葉が刻まれていて、素晴らしいな、と思うところでございますけれども、第1回入学式の言葉「人になれ」「奉仕せよ」という言葉。しかしこれが坂田祐先生が直筆で書かれた色紙が遺されている訳ですよね、これ（→写真4）がそれだと思いますが、「人になれ 奉仕せよ」それに加えた言葉がございまして、それは「その土台はイエス・キリスト也」となっております。また第1回卒業式では、坂田先生はこのように語られておられます。「人になること、即ち人格を完成することはいかに難しいかなである。しかし、実現が極めて困難であっても、それに向かってなされる不断の努力そのものが、価値あるのである」ということをですね、第1回卒業

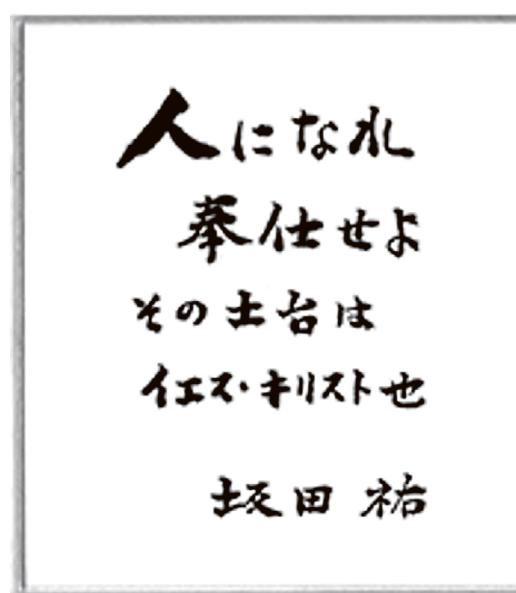


写真4

式で語られました。私はですね、この言葉、また関東学院の140年の歴史的な歩みの中で、関東学院のその教育の心棒ですね、まさに核心としてきた、大切にされてきた理念そのものをですね、読み取ることができるようと思つてございます。まさに、教育とは何か、ということでございますね。教育というのは、工場で製品を生産するようなものではないのだ。学校というのは工場ではないのだ。学校というのは、人を人ならしめ、この世界・社会に仕える者たちを生み育て、人格を完成させる場なのである。それはですね、工場のように、計画的・機械的に製品を、しかも規格の決められた製品を均一的に作るものではないのだ。そうではなくて、一人ひとりと全身全霊で向き合いながら、手仕事的に人になること、奉仕することの意味を伝え、それを肉とするものなのである。そのことをですね、私たちは関東学院の140年の歩みの中から、やはり学ばなければならない。今この時代であるからこそ、私はですね、すべてのキリスト教学校の精神にですね、立ち返る必要があるのだろうかと思う訳です。この思いはですね、もちろんベンネット先生、テンナー先生、坂田先生のみならず、当時のミッションスクールの創立者の共通する思いである。立教学院の創立者のチャニング・ムーア・ウイリアムズも、ほぼ同じことを語っている訳でございますけれども、私たちの教育というのはいったい何なのだろうか。教育というのは工場ではない。今日は文部科学省の方はご来賓にはおられませんでしょうか。おられないのであれば一言申し述べたいのですが、今、私立大学連盟ですね、常務理事をさせていただいておりまして、ほぼ毎月のように文部科学省の高等官僚の方々のお話を拝聴するのですけれども、聞いておりますと、とにかく国の教育政策というのは、まさに国が定めた規格通りに、4年間で製品をちゃんと仕上げてくださいね、そういう国が期待している、あるいは経済界が期待している人材、これをちゃんと4年間で生産できない学校には、あまりお金をつけません、みたいな話になる。それはおかしいだろうと。教育というのは「種まき」ですので、あくまでも私たちは種をまいていて、それを育ててくださるのは、芽を開かせてくださるのは神様なのですね。それがいつ、一人ひとりの子どもたちがいつ芽を開くのかわからない、私たちには。それはもしかしたら卒業してすぐに芽を開くかもしれないし、いやいや50歳になってから、60歳を越えてからようやくですね、キリスト教学校で学んだ言葉が思い返されたりですね。もう一度、その大きさに気付かされる、そういう瞬間というのが必ずあるのですよ。ですので、新渡戸稻造も「人材」という言葉は使わなかつ



たのですね。「人物」という言葉を彼は使っていました。人格を陶冶すること、人物を育てること、それは途方もなく手仕事的です。決して、計画通りに規格通りに作れるものではないのですね。そのことの意味を、本来の教育というもの意味を、坂田先生をはじめ関東学院の創立者の皆様は、140年前から教えられていた訳です。このことを私たちは、大事にすることこそが、実は「経営戦略」なのですよ。こういう手仕事的な教育をしっかりとやることが、それぞれの学校の価値を生んでいくはずです。そのことが最終的には、それぞれの学校の評価につながっていく、ということを、私たちは確認をしたい、と思っております。学校というのは工場ではない、学校というのは人を人ならしめ、この世界・社会に仕える者たちを生み育て、人格を完成させる場である。機械的に製品を作るのではなく、一人ひとりと全身全霊で向き合いながら、手仕事的に人になること、奉仕することの意味を伝えること。実際にはですね、そうした教育の実現というものが困難なものであったとしても、それに向かって不断に絶えず努力するように、我々は神様から招かれているものだと思います。そしてそのような努力そのものが貴くて価値あるものであると、神様は我々を祝福してください。その方こそが私たちの学校・教育の土台である、主イエス・キリストに他ならない。このことを、坂田祐先生は第1回卒業式で語られた「人になれ 奉任せよ その土台はイエス・キリスト也」。この言葉は素晴らしいですね。ぜひ、関東学院は、坂田先生のこの言葉を、学院に留めることなく、広く伝えていただければと思います。もちろん、関東学院がこの140年の間、徹底してこられた建学の精神ですけれども、しかしながら同時に、すべてのキリスト教主義学校が大切にすべきキリスト教教育の根幹で、そういう意味で関東学院の皆さんには、日本にあるすべてのキリスト教主義学校の模範であり、先導者でございます。これからもぜひとも、キリスト教学校を導いてくださることを、お願いしたいと思いま

す。

何かこれで話しが終わってしまいそうですけれども、祝辞になってしまいましたけれども、しかし、このことをぜひ皆様にお伝えしたいことでございました。

それではここからはですね、もう少し一般的な話をさせていただければと思います。

今日は「キリスト教学校として大切にしているもの、大切にすべきこと」というお題をいただきましたので、このことについて私の理解も含めまして、お話しをさせていただければと思います。

さきほど、関東学院の建学の精神の話をしましたけれども、「人になれ 奉仕せよ」ですね。この言葉は、実は、関東学院のみならず、おおよそ、日本のキリスト教学校に共通する、建学の精神の軸であろうと、思います。私もキリスト教学校教育同盟の理事長を拝命してからですね、本日もそうなんですけれども、さまざまな学校の式典や講演などにも、ありがたいことにお招きをいただける機会がたくさんございます。その際に、それぞれの学校の建学の精神や歴史を学ばせていただくところでございますが、そこで気づかされることですね、各学校の建学の精神のいずれにも、共通するものがあり、大きく言いますと2つのポイントだと思います。一つは「真理を探求すること」です。そしてもう一つはですね、「この世界・社会・隣人のために奉仕すること」この2つですね。おおむねこの2つポイントがですね、各キリスト教学校に共通するものではないか、と思っております。

まずその「真理を探求すること」というところではですね、様々な学校によって言い方がありますけれども、整理しますと、おおむねこの4点が挙げられることが多いですね。一つ目は「普遍的な真理を自由に、かつ謙虚に探究すること」、二つ目はですね「神から与えられた才能、資質を伸ばし、科学的知識を培い、技能を磨くこと」、三つ目がですね「伸びやかな発想で自分を表現し、知性を広げ、望みを高くすること」、四つ目が「自分の殻を破り、これまでに身につき、無意識のうちに自分を閉じ込めてきた殻を破って、自分を解放すること」というですね、4点が挙げられるかと思います。

そしてもう一つの軸で触れますが、「この世界・社会・隣人のために奉仕すること」、この中にはですね、一つは「神を畏れつつ、世界、社会、隣人、すべての『いのち』のために、愛をもって仕え、共に生きること」、二つ目がですね「神の前では、一人ひとりの人間が等しい意味と価値を持ち、神から愛されるかけがえのない存在なのであり、尊重されなければなら

ないことを、理解すること」、こういう目標が立てられているかと思います。

その上で、もう少し私自身の専門としております、16世紀の英國宗教改革を起点としておりますけれども、聖公会の神学アングリカニズムに少し引き付けてですね、キリスト教学校のミッションについて考えてみたいと思いますが、実はこのアングリカニズムですね、この特徴を見事に表現してきた言葉がございまして、“VIA MEDIA”という言葉がございます。これはラテン語なのですが、このラテン語はですね、16世紀の聖公会の神学者でありますリチャード・フッカーという神学者が使い始めた言葉でございまして、今に至

3 <VIA MEDIA理解> — 聖書・伝統・理性 —

■私たちは、聖書や伝統や理性を道標にしながら真理を求めて旅をし続ける旅人、不斷に歩み続ける旅人

■あらゆる絶対主義をとらないこと

■聖書・伝統・理性という道標を頼りにしながら、解釈し続ける

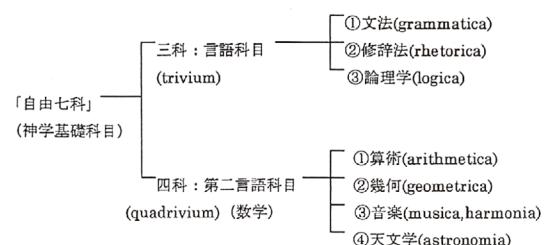
るまでとても大事にしているキーワードなのですが、この“VIA”といいますのはラテン語で「道」という意味でございまして、“MEDIA”は「真ん中、中」ということでございますので、“VIA MEDIA”を直訳しますと「中道」となる訳ですね。聖公会という教会は、ご存じかと思いますが、関東学院の源流でありますバプテスト教会に代表される純粋なプロテスタントの教会と、それからローマカトリック教会、そのちょうど真ん中あたりですので、“VIA MEDIA”は、よくカトリックとプロテスタントの中間のような、そういう言い方をされます。カトリックでもなくプロテスタントでもなく、どっちつかず、ということで「中途半端だ」というお叱りを受けることもあるのですけれども、そういうような理解がございますが、しかしながら実は、“VIA MEDIA”は真ん中という単純な意味ではなく、本来的な意味は、「私たちは、真理を求める旅人だ」という、そういうことでございます。その旅をする際のサインポスト、道しるべとして、聖書・伝統・理性というものを、道しるべとしながら、真理を求めて旅をし続ける旅人なのである、絶えず、不斷に歩み続ける旅人だということが、この“VIA MEDIA”的意味なのです。すなわち道の真ん中を、真理を求める

て歩み続ける旅人、これこそがキリスト教の原義なのだという理解なのです。そこからですね、引き出される重要な示唆は何かといいますと、あらゆる絶対主義を取らないこと、なのですね。道の片側に立ち止まって、私たちは真理を知っています、とは絶対断言しないのです。聖公会はですね、答えをはっきり言わない教会だとよくいわれます。たしかに、極端に言いますと、聖公会という教会はファイナルアンサーを出さない教会、といわれますが、しかしながらその背景にはですね、ファイナルアンサーは神様のみがご存じでおられるということですね。私たちは常に、真理を求めて旅をし続ける、あるいは解釈し続けることですので、旅をし続ける、解釈し続けるのでありますから、簡単に「答えはこれです」とはいわない訳です。聖書や伝統や理性という道しるべを頼りにしながら、解釈し続け歩み続け、そして真理を求め続ける旅を歩み続けること。そのことを大切にしたい、これこそが“VIA MEDIA”的精神なのですが、実は私はですね、これは必ずしも聖公会の教会・学校だけで大事にするものではなくてですね、私たちのキリスト教学校にとっても、ひとつの指標になるのではないか、というように思う訳ですね。規範的な原理になるのではないか、と思っております。

そしてですね、聖書・伝統・理性というそれぞれの道しるべがあるということなのですが、それについて、少しそれぞれ掘り下げる参りたいと思いますが、まずはですね、理性と伝統の方から少しお話しをしたいと思います。この前提としてはですね、中世期から、そして宗教改革からルネサンス、18世紀・19世紀初頭まで、基本的にキリスト教世界といわれますヨーロッパ世界においてですね、ある種の標準理論として、理解があった、そういうところからお話しをしたいと思います。と申しますのも、キリスト教世界としてどういう考え方を持っていたかといいますと、「神が書いた書物が2つある」という理解なのですね。神が書くのです。オーサーが神なのですね。第1の書物はもちろん「聖書」である、ということですね。しかし大切なところはですね、神が書いた第2の書物があり、それは何かというと、「自然」や「宇宙」や「人体」なのですね。これらも書物、テキストだと考えていた訳ですね。神が書いたテキストである、ということです。それなので、いわゆる「神学者」と呼ばれる人たちの務めは何かというとですね、神が書いたテキストを、書物を解読するのです。解釈して解読して、そのことを通して、神の真理を明らかにしようとする、あるいは神の存在を証明しようとする、これが神学者の大切な働きなのですね。神が書いた第1の書

物、聖書ですね、聖書を読み解き、そしてその意味を明らかにする作業、まさに神学者の働きなのですが、神が書いた第1のテキストであるところの聖書はテキストなので、何語で書かれていたか。それはご存じかと思いますが、旧約聖書のオリジナルな言語はヘブライ語ですね。そして新約聖書はギリシャ語です。ただ中世期以降はですね、標準的な聖書はそれらがラテン語に訳された、ラテン語聖書、ウルガタといいますけれども、ラテン語聖書も用いられておりました。すなわち、神が書いた第1の書物である聖書を読み解くための言語はですね、ラテン語・ギリシャ語・ヘブライ語、この3語なのですね。これを「古典3語」といいまして、ヨーロッパ世界のですね、12世紀以降からある大学、カレッジのですね、要件としては、キリスト教を研究する神学部や研究機関が必要だとされていますけれども、同時にですね、古典3語をちゃんと教えていなければ、それは大学とは呼ばれていなかつたですね。大学の要件として置いていたぐらいでございます。

一方で、神が書いた第2の書物ですね、自然や宇宙や人体、これもテキストなので、言語で書かれていたと理解しています。何語で書かれていたと理解していたかと皆様思われるでしょうか。それは「数学」なのです。数学というのは、言ってみれば神学的言語として位置づけられていました。数学という言語を用いて、自然や宇宙や人体という、神が書かれた第2のテキストを解き明かすこともまた、すなわち神学者の務めだったのです。ただし、第2のテキストである自然や宇宙や人体を、専門に数学を用いて解き明かす神学者を、のちに「科学者」というようになったのです。ですので、当時の科学者たちの自己理解は科学者とは思っていないのですね。神学者として考えていたのです。そして、第1のテキストである聖書や第2のテキストである自然や宇宙や人体を読み解くための基礎的な技法ですね、これが必要だった。それが「リベラルアーツ」であります。皆様リベラルアーツというと、一般的に行き渡っている言葉になりましたけれども、ともすると誤解ですね、単なる「教養」みたいな



意味で捉えられがちですが、単なる教養ではなくてですね、こういう7科目ですね、カリキュラムがありました。「自由7科」といわれる、日本語では「リベラルアーツの自由7科」とよばれる神学基礎科目ですね。3科と4科に分けられてですね。3科の方はですね、主に神が書かれた第1のテキストであるところの聖書を読み解くため、解釈するために必要な科目群ですね。その中には「文法」「修辞法」「論理学」があります。これはテキストを読むための技法ですね。これをマスターしなければならない。一方で4科は第2のテキストを読み解くために必要な言語群で、数学なのですが、技能としましては「算術」「幾何」「音楽」「天文学」ですね。算術などはですね、そもそも教会のカレンダーですね、こういったところから始まったわけですから、クリスマスは「固定祝日」といいまして12月25日ですが、イースターは年によって変わるのでですね。それを計算しなければいけない。で、幾何と天文学は宇宙ですね。それから音楽はですね、4科の方に入っている。数学系に入ってきている、これは大変に興味深いところですが、しかしながら、この場にも音楽をなさる方がいらっしゃるかと思いますが、実際にコード進行とかですね、いろいろな音楽理論の考え方方は非常に数学的なのです。なので、数学領域に入っているのは何となく理解できるかと思います。のちにこちらの4科は自然科学系になる訳です。こちらの3科は人文学・社会科学系に広がっていくのですね。ですが、12世紀から13世紀以降の初期の大学においてはですね、文系に進もうが理系に進もうが、必ず7科全部マスターしなければならなかった、ということがポイントですね。今は「文理融合」というですね、立教大学も2026年4月に、新しく池袋キャンパスに環境学部というですね、開設をいたしますけれども、文理融合ですね。教員も半数は文系の方、半数は理系の方とおられるのですけれども、「いよいよ立教も文理融合をはじめます」みたいなことを広報課のスタッフは書くのですけれども、いやいや、そもそも大学は最初から文理融合という、文理が分かたれていないのでですね。トータルで自由7科ですね、これをすべて学ばなければならない。文系に進む人も理系科目ですね、ちゃんと4科をマスターしなければならないし、理系の方の専門に進む人もですね、この3科をマスターしなければならない、それが自由7科、リベラルアーツですね。そういうことの意味を、私たちは大事にしたいな、ということでございます。先ほど少し触れましたけれども、「科学者」と呼ばれている方々ですね、コペルニクス、地動説ですね、プラテマイオスの宇宙論からコペルニクスの地動説、それは太陽中

心説ですね、明らかにした。コペルニクスもですね、ポーランドのカトリックですね、大聖堂の首席司祭だったのですね。コペルニクスの意図は、宇宙モデルなのですが、それまでのプラテマイオスの宇宙論では、地球を中心にしてしまうと、とっても複雑になるのですね。いわゆる「惑星の逆行現象」、地球から見ると惑星の動きが逆行して見える、これを説明するのがとても難儀なことである、という訳ですね、いわゆる天動説では。どう説明したかというと「周転円」というですね、ちょっと長くなりますけれども、周転円という複雑な補助線を付け加えないと説明できない。ですから、プラテマイオスの宇宙論モデル、いわゆる天動説の古い宇宙モデルでは、非常に複雑な、ぐちゃぐちゃしたモデルになるのですね。それを眺めながらコペルニクスは、いや、神が造った宇宙はもっと美しいはずだ、神様が造った宇宙はもっと美しいはずで、シンプルでハーモニーを奏でるはずだ。そういう風に彼はと思っていた。そこでコペルニクスは、いやいや、真ん中に地球を置くのではなく真ん中に太陽を置いてみて、そして説明してみよう、そうすると、見事に、いわゆる惑星の逆行現象をきれいに説明できる。しかも宇宙モデルは、純粋に円を描くようになる。これは美しい、これに間違いない。コペルニクスの、研究の動機はですね、宇宙の論理を明らかにしたいというものではなく、神が書いたこの世界ですね、宇宙の真理を明らかにして神の存在を証明したい、という。なので、コペルニクスの自己理解は、もちろん彼は大聖堂の首席司祭であるということもありますけれども、天文学者ではなく神学者なのです。そのことはすべて同じに言える。一つ一つご説明していく時間がないのですが、ガリレオ・ガリレイ、ケプラー、惑星の運動法則ですね。それからニュートン。アイザック・ニュートンはですね、例えばアイザック・ニュートンの研究者で有名なのは経済学者のケインズなんですね。ケインズは、晩年のニュートンの遺した手書きの原稿・草稿をコレクションして、ニュー



トン研究家だった。調べたところ、晩年のニュートンは聖書研究しかしていないということに、愕然とするのですね。とりわけダニエル書ですかヨハネ黙示録ですか黙示文学をですね、中心に研究していたというのですけれども、ニュートンはそういうことです。そしてロバート・ボイル、ダーウィン。ダーウィンはですね、誤解されていますが、進化論と創造論ですね。水と油で、実際今でも南部アメリカなどではバッティングすることもあるようですけれども、しかしながらダーウィンの本意は、『種の起源』がありますね、立教大学のキリスト教学科の神学書として教科書にしています。岩波文庫から分冊で出ています、大変すばらしい書物ですけれども、彼自身フォーレスという人との対話で、自分は「不可知論神学者」である、といっています。「不可知論」とは何かといいますと、『種の起源』の本意は何かといいますと、「種の起源は、私たちにはわからない」ということなんです。神のみぞ知る、ということなのです。すなわち種が発生してそれが進化していく、そのプロセスについてはダーウィンの進化論で見事に説明できるのだけれども、ではなぜ最初の種が発生したのか、最初になぜ種がこの世に発生したのかについては、わからない、種の起源は人間にはわからない、という意味での不可知論ですね。不可知論神学ですね。それはもともとダーウィンはケンブリッジの聖公会の神学生だったのですけれども、残念ながら日本で『種の起源』が翻訳されたのは出版されてから50年後だったのですが、それよりも早く『種の起源』は日本に紹介されてきています。進化論も紹介されているのですけれども、それはスペンサーという社会学者がですね、東京帝国大学で講演した時に、進化論を社会学的な説明をしたのですが、のちに残念なことにナチズムの優生思想、「社会的ダーウィニズム」につながってしまうのですけれども、ダーウィン自身の理解は全くそうではない、そのことを私たちは大切にしたいと思う訳ですね。いずれも自己理解は「神学者」であって「科学者」ではない、ということです。

これ（→写真5）はロンドンのウェストミンスター寺院、聖公会のロイヤルチャペルですね。エリザベス女王の国葬ですかチャールズ3世の戴冠式が行われましたけれども、このような方々のお墓があります。アイザック・ニュートンのお墓があります。墓碑ですが、科学者ではなくて神学者として埋められています。ニュートンのモニュメントですね。チャールズ・ダーウィンのお墓もウェストミンスター寺院にございます。今年の夏に行きましたら、スティーブン・ホーキングのお墓がこの近くに新設されておりましたけれ



写真5

ども、そういうことですね。そういうつながりがあるということです。ぜひ小学校や中学校の理科の授業ですね、こういう話をですね、ミッションスクールでしていただけだと嬉しいな、といつも思う訳ですね。決して聖書の時間だけがキリスト教の時間ではないので、理科の時間で、ダーウィンの生涯ですか、ニュートンの思いとか、ロバート・ボイルの「神学の言葉」など、子どもたちと共有したい、と思うところでございます。

聖公会の神学者であるリチャード・フッカーは、“tradition”としての「伝統」と“traditionalism”としての「伝統主義」を明確に峻別いたしました。フッカーは、伝統は“lifeline”、生命線だといっています。そしてそれは、イエス・キリストの働き「ミニストリー」といいますけれども、つまりイエス・キリストが語ったこと、行ったことを伝える生命線ということですね。イエス・キリストが心臓であるとして、その福音が心臓であるとして、その動脈として時代を越えて血液のように流れてくるものが“lifeline”としての伝統であるとして、私たちもそれを後に引き継いで行く。私たちを生かしている、私たちに命を与えているものが伝統なんだ。一方で「伝統主義」というのは、それは“dead hand”である。死せる手枷足枷、過去の束縛ということになります。かつて決めたことが不变不動であるものとして絶対に変えてはならない、守らなくてはならない、ということなのですね。それは単なる“dead hand”伝統主義、手枷足枷でしかない。それは否定されるべきものであると、フッカーは断言しています。伝統というのは、昔決めたことをマニュアルの如く後生大事に取っておくものではなく、そうで

はなくて、まさに“lifeline”としてイエス・キリストにつながるミニストリーを受け継いでいくことであって、それを伝統というのだ、ということですね。その時々、その時代の状況に応じて、その文脈・コンテキストの中で、解釈し続ける、そのことが私たちにとってとても大事なこと、ということでございます。

リベラル、という言葉がよくありますけれども、進歩主義とかそのような話ではなくて、本来の意味は、頑なな伝統主義や権威主義を排除する姿勢、ということを、私たちは忘れてはならないと思います。そういう意味で、私たちキリスト教学校はなおさらですね、過去の伝統を最大限に尊重しつつ、しかし文字通り・字義どおりの解釈を強制するのではなく、それぞれの時代・状況の中で、先ほど申し上げた理性を駆使して、真理を求めて絶えず探求するという、本物のリベラリズムを失ってはならない、と思います。

伝統を重んじつつも常にインクルーシブ・包括的であることの大切さ、絶えずダイナミックにクリエーション・創造や営みを続けることの大切さ、この世界に於けるどのような制度にも真理の絶対的確かさを求めたり、固定化させたりすることの無い事の大切さです。私たちのそれぞれの学校に於いても伝統をどう考えるか議論が必ずあるかと思いますが、その際にもぜひ本来の伝統理解を手掛かりにしたいと思います。いかにそれぞれの状況の中で伝統を伝統主義・マニュアルではなく“lifeline”として解釈できるのか、それぞれの学校にとって“lifeline”とは何かを考える事、それは即ち伝統を考えることではないかと思っています。

私達は伝統主義に陥っていないだろうか、この事の反省が認められるのではないか。そういう意味では関東学院のライフラインは何かを考える事が即ち関東学院の伝統を考える事だと思います。

さて、次にキリスト教学校とりわけキリスト教大学のルーツについて少し触れておきたいと思います。そもそも大学の起源とは、先程少しお話しましたけれども、12世紀・13世紀に誕生したカレッジ、とりわけパリ大学・オックスフォード・ケンブリッジなどのカレッジに遡る訳です。これらの初期の大学にありました学部、これがとても興味深いのですが、概ね3つです。神学部・医学部・法学部であります。大学とは基本的には、聖職者を生み育てる場でございました。神学部を出ますと司祭となります。司祭は人々の精神的・霊的・スピリチュアルな痛みに寄りそう仕事ですね。専門職です。そして医学部を卒業しますとともに医者になります。それは人々の身体的・肉体的痛みを癒す働きを担います。そして法学部を卒業します

5 キリスト教学校のルーツとミッション

- 大学の起源～12・13世紀
オックスフォード大学・パリ大学・ケンブリッジ大学
- カレッジ(3学部)の目的は聖職者を育てる
- 神学部→司祭→精神的・霊的痛み
- 医学部→医者→身体的・肉体的痛み
- 法学部→法律家→社会的痛み
- これらの「痛み」に寄り添う職業(vocation/calling)
(召命)こそが「聖職者」

と法律家になる訳ですが、それは人々の社会的痛みを解決しようとする職務ですね。いずれにしましても、これらの痛みに寄りそう働きが職業となるわけです。職業・または権守とも呼ばれました。職業を英語で vocation 、 calling という言葉を使いますが、それはそれぞれラテン語の「召命」ですね。漢字で書きますけれども、聖職者・牧師さんに召されていくこと、と言いますが、しかしこの神によって与えられた使命に召される者、このような職業それを聖職者とみたのです。即ちこうした人々を生み育てることこそが、カレッジの務めであった。それは究極的には私たちキリスト教学校全体の使命であって、建学の理由に他ならないと思います。カレッジとは元々 12世紀・13世紀に修道院から発生したものでございまして、教員と学生が共に祈り、ともに生活して共に学ぶ空間のことです。真理を探求する、無限の大義を共にする場である。時代を越えて空間を越えて真理を探究することができる場こそが、キリスト教学校のルーツであるということです。

2009年に立教大学へお招きいたしました、元アメリカ聖公会総裁主教であったフランク・グリズウォルド主教は、このように語られました。「キリスト教学校・大学とは心理を味わう場所であり、学生、教職員とは心理を探究する旅人である。大学は学生の“character”を形成する場である。“character”とは単に、性格とか人格ということではなく、自らの弱さや不確かさを自覚する変化を恐れない精神を意味する。だからこそキリスト教学校・キリスト教大学は真理を探究するために常に開かれてはなければならない。閉じられてはならないのである。自らが試される、自らが否定されることを恐れてはならない。ことにキリスト教を規範とするキリスト教学校・大学は、そのような意味で〈危険な場〉とならなければならぬのである」と言われました。

私はこれを大切なメッセージとして今でもよく振り

返るのですが、そういう意味で、私たちキリスト教学校の課題とは、まさしくこのような意味において、〈危険な場〉となることではないか。批判すること、批判されることを恐れないで、真理とは何かにこだわり続けること。自己の存在を知り、他者の存在に気づき、人間を学び、世界を読み解くこと。いわゆる「常識」「定説」を疑うこと。「権威」を問い合わせ、相対化させること。そして自らのオリジナルの原書・原文、第一次資料にあたり、読み確かめること。日本に無いものであれば、実際に海外まで出かけて行って自分の目で確かめなければならない。そしてそのために、必要な言語を習得する必要があるのですね。英語を学ぶために外国に行きます、というのはナンセンスですね。何のために英語を学ぶかですね。必要だからですね。そのような順序は大事にしておきたいと思います。ただ英語ができるようになるのが目標ではない。何のために外国語の習得が必要なのか。私たちキリスト教学校が語るべきグローバルとは、そういう事ではないかという風に思っている訳でございます。そのようにして学生たち・生徒・児童に対しては、自らの“character”を創りあげていって欲しいと思う訳でございます。

そして、聖書・伝統・理性という3つの柱の最後ですね、一番大事な『聖書』についてお話をしたいと思います。

聖書を読むという事はどのような行為なのかについて、少し考えていきたいと思います。聖書は「神の絵本」と言われることもございます。神様の働きという見えないものを、文字という絵具を使って描いた「絵本」という訳ですね。なるほどな、と思う訳です。ノンフィクション作家で評論家の柳田邦男先生は「人は人生の中で三回違った形で絵本に出会う」とおっしゃっています。最初は、子どもの時代、つまり親などから絵本を読んでもらうときである。二回目は、子どもを育てているとき、即ち子どもに絵本を読み聞かせるとき。そのときに再び絵本と出会うわけですね。最後の三回目というのは、人生の終盤を迎えて様々なことを経験をしながら絵本を読んだときに、改めて絵本の世界の奥深さに気づかされという事です。なるほどな、と思う訳でございます。また、歌人で有名な俵万智さんは『本と私—四十四人の体験的読書論』三省堂の中で紹介されてる絵本の中で、『三びきのやぎのがらがらどん』ですね。福音館書店から1965年に出ていて、私は1962年生まれなので、多分3歳頃に読んでいたのではないかと思うのですが、その『三びきのやぎのがらがらどん』との出会いを生き生きと書かれています。俵万智さんは2歳から3歳のころに絵本『三びきのやぎのがらがらどん』を、お母さん

に日に何度も何度も読んでもらっていたそうですね。たしかに幼子は、好きな絵本を何度も親に読んでとせがむ訳ですね。私にも3歳の孫がいるのですが、孫がですね、行きたびに同じ物語を何度も読んでくれと。さんざん読んで、もうお互い覚えてしまうのですね。しかし決して飽きもせずに読んで読んでとせがむ訳ですね。そしておとなしくじっくりと最後まで聞いています。幼い俵万智さんも、お母様が読んでくれる絵本から、物語をとおして言葉が楽しみと喜びを与えてくれることを体験されたと言っています。言葉には目には見えないものを見るようにして、生き生きと喜びを与えてくれる力があるという事を、本能的に感じ取っておられたそうです。俵万智さんは、3歳の時にまだ字が読めなかったにも関わらず『三びきのやぎのがらがらどん』の文を、一言一句違わずに話すことができたと書いておられます。

私は、俵万智さんの『体験的読書論』から学ぶことは何かというと、子どもというのは言葉を覚えるのではないのだということです。そうではなくて、「食べる」のだということですね。おいしい言葉を心ゆくまでたっぷり食べて、心の奥底でその喜びを味わうことが出来た子どもは、いつしか無意識のうちにその自ら意思でその言葉を紡ぎだしていく。それは、先ほどの工場の話ではありませんが、いつのことか私たちには分からないのです。しかし、ある時に不思議に紡ぎだされていくのですね。同志社教会で牧師をされておられる望月修治先生はこのように述べられていました「おいしい言葉を日々の糧として、子どもたちに、いわば口移しで食べさせることが親や大人の務め」と言われていますが、たしかにその通りだと思います。

マタイによる福音書第4章第1節から第4節に、こう書かれています。「さて、イエスは悪魔から誘惑をうけるため、“靈”に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑するものが来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口からでる一つ一つの言葉で生きる』と書いてある」ということですね。ここでイエスが言った言葉は「人はパンのみで生きるものではない。神の口からでる一つ一つの言葉で生きる」これはですね、旧約聖書申命記第8章第3節の言葉をイエスは引用してます。また、エレミヤ書第15章第16節ですね、「あなたのみ言葉が見いだされたとき、わたしはそれをむさぼり食べました。あなたのみ言葉は、わたしのものとなり、わたしのこころは喜び踊りました」とあります。預言者エレミヤはですね、迫害

に遭いながらも神から預かった、預言者の預は予想するの予ではなく言葉を預かる、ですね。預言者エレミヤはですね、神から預かった言葉を民衆に語り続けたのですが、彼はそれは、神の言葉を読んだからではなくて、「神の言葉をむさぼり食べた」からだということです。預言者エレミヤは人々に対して「悔い改め」を求めました。「悔い改め」とは、新約聖書が書かれましたギリシャ語の言語では「メタノイア」という言葉が使われます。それは本来は視点を変える・生き方を変えることを意味しています。そうした、視点を変えていくこと、生き方を変えていくこと、それは実は、神の言葉を食べることによって実現するのだという事なのですね。たしかに「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」のである。先般亡くなられた旧約聖書学者の左近淑先生は、こう書かれています。「聖書に生きる人はみな、聖書を読み捨てたのではなく、食べ噛み碎いて生きた。聖書は読むものではない。食べるものである。」ということなのですね。これはもう本当に真理なのだろうなと思う訳です。これはもちろん聖書を読むだけでなく、あらゆる読書ですね。実は言葉を噛み碎きながら食べ、真理を味わう行為だったのです。なので、私たちの子どもたちですね、小学生・中学生・高校生・大学生それぞれにレベルがありますけれども、是非本を読ませたい。それは読ませたいのではなく、言葉を食べさせたいのです。それがまさに実は、リベラルアーツの大事な根幹でもあります。それはなぜかというと、すべてテキストですから。この世界は神が書いたテキストなのです。

もう一つの大事なテーマは、多様な一人ひとりの存在を大切にすることです。それこそは、もちろん言うまでもなくキリスト教学校の使命だろうと思います。聖公会が大切にしている教会理解なのですが、それは「風船型」でなく「鳥の巣型」と言いますが、それは、何らかの原因によって穴があけば萎んだり、破裂してばらばらになってしまうような風船のような交わりではなく、そうではなくてむしろ鳥の巣のような、異なる無数の小枝で作られており、しかしながら隙間があっても針で刺しても、その巣は壊れることなくその中で卵、そしてひな〈いのち〉を育てるという神の目的を担い続けています。そういう意味で私たちのキリスト教学校も、関東学院もですね、「鳥の巣」なのだろうと思います。そのなかで、児童・生徒・学生たち一人ひとりは多様な「枝」として、大切に育てられるのではないかということです。

最後に、私が大切にしているストーリーをご紹介して、講演を終えたいと思いますが、先ほど冒頭でご紹

介いただきました、私は、実は大学の専門は工学なのですね。とりわけ超電導や太陽電池の素材などに用いられている、アモルファス金属の研究をしていたのですが、それがキリスト教神学の研究へと大きく方向を展開させたのは、様々な痛みや苦しみの現場で生きざるを得ない人々との出会いでした。その一つは、私は京都の出身で、京都駅の南側、東九条という地域にたくさんのが在日韓国・朝鮮人が住んでおられて、そこでの出会いがありました。もう一つは沖縄にあります国立ハンセン病療養所愛樂園での元感染病の方々との出会い。ハンセン病は結核と同じ抗酸菌の仲間のらい菌による感染症で、すでに治療法も確立してまして、ごく普通の疾患となっているのですが、しかしながら、全国のハンセン病療養所には過去の偏見や差別などから社会に復帰できずに、今でも多くの方々が生活しておられます。2001年5月のことなのですが、ハンセン病国家賠償請求訴訟の原告団と、当時の小泉首相が面会した、という出来事がありました。その際に、原告団の一人に、鹿児島県の星塚敬愛園にお住まいであった日野弘毅さんが証言をされているのです。それを最後にご紹介したいと思います。こういう証言がございました。

「昭和24年、16歳で入所して以来、ずっと療養所の中になります。私にも愛する家族がありました。昭和22年の夏、突然保健所のジープがやって来ました。私を収容にきたのです。母はきっぱりと断ってくれました。ところが、ジープは繰り返しやってきました。昭和24年の春先、今度は白い予防着の医師がやってきて、私を上半身裸にして診察したのです。

その日から、私の家はすさまじい村八分にあいました。18歳だった姉は婚約が破談となり、家を出なければならなくなりました。小学生の弟は、声をかけてくれる友達さえ、いなくなりました。弟がある日、母の背中をたたきながら、「ぼく病気でないよねえ」と泣き叫んだ姿を、忘れる事はできません。このまま家にいればみんながだめになると思い、自分から市役所に申し出て、入所しました。それなのに家族の苦難はやみませんでした。

それから20年あまり、母が苦労の果てに亡くなったときも、見舞いに行くことも、葬儀に参列して骨を拾うことともかないませんでした。18歳の時、家を飛び出した姉は、生涯独身のまま、平成8年、らい予防法が廃止になった年の秋に自殺しました。姉の自殺は母の死以上に、私を打ちのめしました。

姉の思い。母の思い。いまだに配偶者に私のことを隠している弟、妹の思い。そのために、私は訴訟に立ちました。

判決の日、私は詩をつくりました。

太陽は輝いた／90年、長い暗闇の中／ひとすじの光が走った／鮮烈となって／硬い巣を碎き／光が走った／私はうつむかないのでいい／市民のみなさんと光の中を／胸を張って歩ける／もう私はうつむかないのでいい／太陽が輝いた」

このような証言でございます。

日野さんは、2017年10月19日、老衰のため83歳で召されました。私たちはこの日野さんの証言をどのように聞くのか。まさにこの中に私たちキリスト教学校が大切にすべき、キリスト教学校が大切にすべき真理があるのでないかと思っています。先程の証言の中で日野さんは、このように語られました。「もう私は俯かないでいい、光の中を胸を張って歩ける」と。この言葉はまさに失われた人間としての尊厳・存在の回復宣言であります。私たちが求められているのは、私たち一人ひとりが誰一人零れ落ちることなく、もう私は俯かないでいい、光の中を胸を張って歩けると宣言することのできる社会・世界の実現でございます。それこそが、私たちの児童・生徒・学生たちが、そのことを大切にできる人間となってもらいたい。それこそが私たちが大切にしてきている建学の精神ではないか。キリスト教の大切な要素ではないかと思う訳でございます。

私たちの子どもたちには是非とも苦しむ人々・疎外された人々の痛みに寄り添い、癒す者となってもらいたい。そしてまた私たちの子どもたちの人生という旅の小舟が、時には嵐に揉まれて溺れそうになったり座礁してしまうようなことも起こります。予想もしない困難な状況、今本当に困難な状況です。困難な状況や人間関係に躊躇したり言い知れないどこかに陥ることもきっとあると思います。しかしそんな時に彼女・彼らはまた、あなたは俯かないでいい、光の中を胸を張って歩くことを、励まされ、導かれている存在であることを私たちは伝えたい。全身全霊で伝えたいというように思っています。それこそが私たちキリスト教学校の使命であり、最初に申し上げた通り、そのことが少しでも彼女・彼らのこれから的人生の中で種となってくれることを願い、祈りながら、私たちは学校の運営にあたっている。私たちにできることは種まきでしかないのですが、あとは神様に全てを委ねて、それぞれの種が豊かに芽を出し実をつけ、花開くことを祈るばかりであります。

これからもですね、140年を超えて150年を迎える、さらにこの種まきの働きを関東学院の皆様がなさっていかれること、これを神様が祝福されていること、導かれることをお祈りいたしまして、以上で終わりたいと

思います。ご静聴ありがとうございました。

—最後に松田学院長より—

西原先生、どうもありがとうございました。

大変感銘深いお話をいただきまして、いくつかお尋ねしたい点もあるのですが、大まかなところでやはり先生が考えて下さっていることと、私たちが目指していることとは、そう相違がないかなど、大変励まされた次第です。一つ二つ心に残ったことを取り上げますと、先生はアングリカニズムのご専門ということで、聖公会がカトリックとプロテstantの中間をとりなすという、道の真ん中で旅を続けていくということですね。私はやはり、現代の絶対主義というものが横行していくって、昔からあった律法主義だとか原理主義だとかラディカニズムとか、自分たちを絶対化するような策動が、今でも色々な戦いの原点にはそういう問題があろうかと思います。それをやはり神のみがファイナルアンサーをお持ちだという事で、考えていらっしゃる。これはやはり世界の国と国が争ったり、なかなか問題の解決を得られないところに、アングリカニズムの立場から、どうとりなしをしていくかということは、大変重要なお立場にあるのではないか。私たちバプテストはどちらかというと個人主義に陥りがちなので、先生のお考えをお尋ねしながらこれをすすめていきたいと考えたのです。

あと、伝統と伝統主義、やはり私たちは伝統主義に陥りがちですけども、やはり良き伝統、レガシーみたいなものを、私たちが受け継ぐところに私たちの生命線、ライフラインがあるのだなということを共感させていただきました。

大変力強い、また知らないことを教えていただけて、有益なお話を聞くことが出来ました。ありがとうございました。



座談会 一創立140周年記念講演会を受けてー

日 時：2024年10月18日（金） 18：10から19：40

場 所：大学応接室 D

参加者：ファシリテーター 伊藤多香子（学院・宗教主任・六浦中高）

松田 和憲（学院・学院長）

豊川 慎（大学・理工学部准教授）

内藤 幹子（大学・経営学部教授）

熊田 凡子（大学・教育学部准教授）

高井 啓介（大学・国際文化学部教授）

（発言順・敬称略）

伊藤：それでは始めます。先日の140周年記念講演会の西原先生のお話だけではなくて、実は松田先生が礼拝の時にお話しされた内容が、西原先生の話とつながっていて、私は完全に打合せをしたのだと思っていて、そうではなかったと聞いて驚いたのですけれども。なのでまず、松田先生が礼拝でお話しされたこと、特にこの中で松田先生がどういう意図でお話をされたのか、そこから話を広げて西原先生のところに移っていきたいと思います。ではよろしくお願いします。



松田：140周年ということで、何を話そうかと思いをめぐらせながら、過去・現在・未来ということで、「ヘブル人への手紙」が入ってきて、11章、12章あたりということで話を進めて、信仰の父アブラハムの生き方、「行く先を知らないで出していく」という文言は創世記12章には出ていないのだけれども、ヘブル人への手紙の作者は、「行く先を知らずに出て行った」という一節を加えているんですね。その意味を、森有正氏によれば「冒険と同化」という中から、「冒険する心」、「冒険する」ということは、危険を冒して未知の

世界に飛び込むということだけではなくて、新たな思いで、与えられる事柄に目を開いて、そこに積極的に向かっていく、期待を持って向かっていく、という積極的な意味がある、ということです。アブラハムは行く先を知らずに出て行ったのだけれども、それは無定見とかいうことではなくて、神様が行き先を示してくださいさる、という信仰に則って足を踏み出したのではないかという、その姿勢が大事だと。自分があれこれ考えて決定するのではなく、最後の行く手は、全能の父なる神様が示してくださいさるということに信頼を置いて、歩もうとしていた、それは、私たちの信仰の姿勢とも、つながる事柄だったのではないかと。そして、アブラハムの信仰から学ぶことは私たちの歩みと無関係ではないのではないか。一例を挙げれば、今から105年前に起こった、中学関東学院を設立しようとしたときに、訓令第12号ということで、それとの非常に大きな対峙というか、それをどうやって受け止めたらいいか。この訓令によって宗教教育をしてはならぬ、礼拝もならぬ、聖書もだめだという。一方で文部省の言うことさえ聞けば、きちんとした恩典を与えるし、保護の下に経済的なバックアップもする。そういう中で、テンネー先生、坂田先生は、やはり非常に不自由で、そのことによって出てくるマイナス要因を越えて、キリスト教教育に徹するということを選び取っていました。土肥昭夫氏が言っているように、訓令第12号の力に屈して閉校した学校もあれば、キリスト教教育を止めて恩典に浴した学校もあった中で、それは大変な決断だったのではないかと思います。それは過去のことと、私たちには関係ないのか、というと、アブラハムの信仰から学んで、冒険する心を大事にしながら、今、困難な時代の中でも、同化してしまうという

よりも、冒険の心を持って進んでいく必要があるのではないか。それならば、我々、今の時代に何の葛藤もないかというと、いろいろな葛藤がある。第2次世界大戦が終わってすぐの教育基本法は優れていたけれど、2006年に安倍内閣の下でなされた、「美しい日本」とかなんとか、そして基本法の改悪が現実となってしまった。その次に起こったのが道徳の教科化。これは熊田先生にもお話したことがあるのだけれども、チャプレン会で小冊子を作つて、それぞれの意見を集約して、キリスト教学校教育同盟（以後、教育同盟）総会の際に、皆さんにお渡しした。これも大きな戦いであった。今度は私学法の改正ということで、皆さん戦々恐々としているけれども、そういう戦いはいつもあるのだから、キリスト教学校として、学院は何を大事にしていくかが問われているのです。いつもチャレンジを受けていることではないか。関東学院というと「人になれ 奉仕せよ」が「道しるべ」といわれているけれども、坂田祐先生が「その土台はイエス・キリスト也」とおっしゃったことは非常に意味のあることで、「人になれ 奉仕せよ」が独り歩きをして、安っぽいヒューマニズムに墮することなく、しっかりとイエス・キリストを土台とすること、このことは、西原先生も最初の言葉で評価してくださっていました。それをしっかりととした旗印として、やっていく必要があるのではないか、ということだと言うことです。西原先生の話とイエス・キリストが土台であるとか、冒険する心・探求する心につながることだと。アングリカニズムの絶対主義批判というのがあって、アングリカニズムというのは中庸主義で、でも懐の深い中庸主義というのは、聖書の時代から律法主義だとかラディカリストだとか、絶対主義的なものの考え方で、自分の考えは絶対で、他を裁く、「アレかコレか」の考え方が強調される中で、アングリカニズムは懐が深くて、今の中東のイスラエルとハマスの関係とか、ウクライナとロシアの関係とか、両者の間を取り持つ姿勢も持つておられるのではないか、そうした取りなしの姿勢は学ぶ点が多いのではないかと思います。

伊藤：はい。ありがとうございました。松田先生がこの礼拝でこのことを語られた後に西原先生の話を伺つたので、打合せをされたのかなと思うくらいに一つの柱が見えてきたように思うのですけれども、先生方は如何だったですか。私は「冒険」という言葉が先生からたくさん出てきたのですけれども、ベンネット先生の、最初の、とんでもないことをしているな、ということもあったのですけれども、そのあと、東京中学院が横浜に来た時の、東京学院が私立中学関東学院に

なったときも、大きな冒険だったと。当時のキリスト教学校の中では、その強さを持つのが非常に難しかったのに、私はそこで関東学院が非常に頑張ったというイメージがなかった。それは、表にキリスト教を出すよりは、125周年までは、どちらかといえばキリスト教は控え目な学校だったのですね。なので、ここにきて歴史を見て初めて、うわ、こんなことしていたのだ、と思って、生徒にも必ず言うところなのです。その冒険という意味が、ただ新しくワクワクすることだけではなくて、新しいこと、始まりを感じているというか、新たなものに触れることで自分も新しくされて心を開く、ということが出ていて、私は、関東学院は3つの源流というけれども、毎回新しいことをしている。よくそれを1つにまとめていったな、という気もするけれど、でもその新しいことをしている時に、必ずその時代の中でニーズ、求められているものに、応えよう応えようとしている、その誠実な姿が見えているのではないか。関東学院の中のキリスト教は、それだけの強さを持っているものとしては表に出でこなかつた。125周年の後から、ですよね。125周年になったときに、横浜駅の京急の看板なのですけれども、バーンと「関東学院がキリスト教です」と出したのですよ。え、どうした、と思ったのですね。関東学院、路線を変えるのかな、と思ったのですよ。どちらかといえばそういうのをないようにしていたのですね。

豊川：お聞きしたいなと。その前は、あえて、ということだったのですか。



松田：やはり、日本の中で、バプテストが主流にはなれなかった、と思いますよ。なぜかというとやはり、バプテストの個人主義的なものの考え方、というのがね、アメリカは個人主義だから、私がやりたいことをやる、というか。だからバプテストはアメリカでは最大の教派になった訳です。ところが日本では、日本の風土は「長い物には巻かれろ」というね、お上がりいで

お上の言うことを聞くのが、というかたちで。バプテストは個人の自己理解とか主体性とか強調するじゃないですか。日本人は御家が大事だったり天皇家が大事だったり、長い物には巻かれろということで、お上にちゃんと指示してもらった方が動きやすい。だからバプテストは、私はややもすると烏合の衆になってしまい危険性をはらんでいたと思うのです。ですから主流にはなれなかった。バプテストが主流になれたのは、キリスト教教育の場として、関東学院とか西南学院とか、尚絅だとか、教派としてはあまり成長できなかつたのだけれども、キリスト教学校を持てたということで、役目を果たせたとのかな、という風に思います。

豊川：ではその125年を機に、キリスト教主義を打ち出したということなのですか。

松田：私の理解では、土肥昭夫先生が書いたものを読んだのですが、訓令第12号に対しても、関東学院がどれほど戦ったかについては殆ど書いておられませんでしたね。

伊藤：そうですよね。触れていません。

豊川：そこがね、西原先生の話で言えば、伝統と伝統主義と、どういう形で、バプテストの伝統というものをキリスト教教育の場で生かしていくのか。あるいは、マイナスの面をどういう風に考えるのか、関東学院のバックグラウンドとしてのバプテストと、理解していくか。アイデンティティーの問題にも関連していきますし。

松田：西原先生の言ったことでいうと、伝統と伝統主義ですね。traditionとtraditionalismというかね。やはり traditionalismというか伝統主義は固定化した、律法主義とか教条主義というか、それだと硬直してしまって、キリスト教会が大事にしたのは、伝統を重んじるということは、新しいことに対して、自らを相対化できる姿勢を持っていたということだったの思うのですね。バプテストは教条主義ではないといいながら、自分たちの教派主義だとか、伝統主義ということに縛られて、そういう柔軟さというのが薄れた。ところが、アングリカンは、懐が深くて、少々のことが違っていてもいい、仲良くしましょう、というおおらかさというか。バプテストは白黒はっきりつけて、違うなら違うでどうなんだ、という形で、はっきりさせたいということで、結局相手を受容できない面があつたのかなと思っています。

伊藤：内藤先生にもお伺いしたいのですが、内藤先生、今バプテストのことがだいぶ出ておりましたけれども、如何でしょうか。



内藤：私は大学の学部から大学院まで立教大学で学びましたので、久しぶりにこの“VIA MEDIA”とか、リチャード・フッカーの話を聞いて懐かしく思いましたけれども、率直にこの西原先生の話を聞いたときに、私個人としては、アングリカンの、英国教会の中からバプテストが出て行ったけれども、教会形成の点では全く違う教派になるけれど、根本的な点においては同じだった、という思いを私自身は持っています。たしかに歴史的な経緯であるとか、それぞれの教団形成の話を聞いた時には、松田先生がおっしゃることもよくわかるなど。ただやはりバプテストの目指したものは、自分たちが教会に主体的に神様の前に真理を探求することであり、また同時に、西原先生のお話を借りると、絶対主義を取らない、ファイナルアンサーは神のみがご存じである、という言葉が印象に残りました。そのことを思いながら、どうしたら共に生きていけるのか、バプテストも、私の考えでは目指しているのだろうと思うのです。ただそれが、なかなか現実としてうまくいかない、ということが、理想と現実のギャップというものが少しあるのではないかと思いながら、今、松田先生のお話を興味深く聴かせていただきました。

伊藤：ありがとうございます。豊川先生、途中で切ってしまったようでしたので、如何ですか。

豊川：ありがとうございます。キリスト教教育を考える際に、学校法人全体として、バプテストの特質というものをどう理解して、それをどういう風に継承していくか、ということについて、ある意味、個人主義化しがちだとおっしゃっていて、バプテストの伝統の中で信教の自由とか人権の問題とか、やはりバプテストの伝統の中から生み出されてきたものがあって、それ

を大切にしつつ、なお社会との接点というか、個人主義がある意味無関心に陥ってしまったとか、そういうことがありますので、どのように学生また生徒たちに対して、社会との接点を、自己の命とか尊厳とか自我を大切にしながら、バプテストの中でそれが弱いのであれば、どういう風にミーイズムということであれば、どういう風に教育の中で考えていくかという、それは、バプテストはバックボーンでありますけれども、バプテストというよりもキリスト教教育ということで、良き伝統を継承しつつ、どういう風にプラスアルファを考えていくか。それはちょうど125周年という区切りだったのか、ちょっと気になるところではあります。

伊藤：125年は大きな、一つ先に進んだ、キリスト教が大きく先に進んだ一歩だったのかな、そんなことはなかったのですか。その前から、松田先生がこの間、教育同盟の総会でお話されていましたけれど、そういうのが落ち着いてきたということだったのですか。

豊川：誰かの先生がイニシアチブをとって。その当時の学院長とか。キリスト教主義を打ち出しましょうとか。

伊藤：私は、創立128年くらいの時に就職しているのですね。外部の学校にいて、125周年をバンとやっているのを見て、変わったんだなと思ったのですけれども、実際就職してみたら、いろいろな課題を感じたのですね。教育同盟の総会の時に、今年の総会と、前回まで関東学院で実施した総会を見ると、キリスト教についてだいぶ安定されたのですね、いろいろな学校から言われたので、それで125年から140年を支えてこられた方々が、今の大学の先生を含め皆さんだと思うのですけれども、キリスト教に関してはですね。そういう方々の苦労がここにこう実っていた気がして。あるいはスタートだったのかもしれないですけれども、むしろスタートすることができたのも、すごかつたなと思っていて、来てみたら。いろいろなことがわかって。だから、上の方の人たちがやったから浸透はしていなかつかもしれないけれど、何とかそこに行こうじゃないか、というものが、140年に結実していくよう。それは学院長のリーダーシップの下に、先生が学院長になられてからでも、1期目のときよりも2期目の方がもっと精力的に、キリスト教を出しますよ、と私には見えているのですが、そういうかたちで結実していったのが今回だったのかなと思っていて。だけれども、さきほど冒険の話をしたので。あの時に

「3つの源流」という話を始めたのですか。

松田：まあそうですね。125年の時に、第1の源流・第2の源流・第3の源流と、ちょっとこじつけっぽいかな、という意見はあって。初めて「関東学院」という名前がついたのは三春台の中高だし、三春台はある種の強い思いを持って、三春台が本流だということを言っておられる方もいるけれども、色々と調べてみると、ベンネット先生とテンヌー先生と坂田先生という流れは、しっかり繋がっています。確かに「関東学院」の名称が付いたのは1919年の「中学関東学院」が最初だったけれども、1884年にベンネット先生の下で「横浜バプテスト神学校」を始めたというのは、無理偽りのない、こじつけでも何でもない流れだったということですね。西原先生が非常にコンパクトに学院の草創期について説明してくださり、渡瀬寅次郎のこと、「人になれ 奉任せよ」「その土台はイエス・キリスト也」のことも紹介してくださり、前後がしっかり繋がった感じがしました。

伊藤：ごく最近の関東学院の変化ということでお話をしたのですが、先ほど少し豊川先生、キリスト教教育ということで、個人主義ということとどういう風になっていくのかと、いう課題があるのではないかと投げていただいたかと思うのですけれども、熊田先生、まだこちらの学校にいらして3年ですよね。私は学校における宗教教育は大学が一番難しいのではないかと思っているのですね。こども園は、生活がキリスト教教育なので、中高までは生活で何とか持っていく。でも大学生を見ていると、そこに来てその時間だけ、なかなか難しくて、自分一人の問題で終わってしまって、他の人にまでいかないというか。そんな風に思うのですが、どのように思われますか。



熊田：たしかに、伊藤先生がおっしゃったとおり自分一人の問題で、となるように思うのですが、でもまずそこにあるのがとても大事かな、と思っております。

学生が、もしかしたら初めて触れている聖書の話であったり、いろいろな方が礼拝で聖書のことを通して、人生を語ってくれる方も多くて、生き方を、坂田先生の言葉を借りるのであれば「その土台はイエス・キリスト也」という、その姿を何かしら触れていて。しかも2、3行かもしれないけれど、感じたことを書いているということは、私にとっても大事なことかなと思っていると、たかだか2、3行なのに何かを感じている。まず内側から始まっているのは、キリスト教を教える学問的な部分も大事ですけれども、自分がひと時でもお昼の時間に、自分と向き合ったり、人の話から少し体を安らげたり、そのひと空間があることを、関東学院のこの大学の礼拝のあり方は、私はすぐにほかの大学と比べてしまうのですけれども、縛りがあまりなくて、自由度があって、個人で決めるという部分は、これはもしかしたら大事にしてきた部分でもあったのかなと。前は緩すぎたのかもしれないですけれども、それが却って、学生が自分で神様に委ねたりすることができるような、時間が経てばまた信仰に導かれるのであれば嬉しいな、と感じています。中で感じることが、このアブラハムの出発もかもしれません、関東学院の先達の方たちの中から起こって冒險を始めるというか、そこと重ねてみると、とても興味深く思っています。私は教育の授業で聖書のことに触れることがあるのですけれども、イエス様の目線というか、イエス様が子供たちのことをどう見ていたのかということを、聖書の言葉を借りて、学問の中にも、やはりキリスト教的につながっているということを、大学の中では大事にしているところです。



豊川：西原先生の話の中で、諸学という、科学の話もありました。大学の起源として、自然科学の発達の背景にはキリスト教があるのだとか、少なくとも大学において、キリスト教を学ぶ意義、それはやはり学生にしてみればいろいろな学部生がいますから、自分の学んでいることとキリスト教がどう関係しているのかという、そういうことがわからないと学ぶ意欲が起こら

ないので、だけれどもキリスト教というのはあらゆる学問に関わっていますし、政治にしてもそう、教育にしてもそう、法思想にしてもそう、私の属している理工学部の自然科学もまさに、西原先生のお話にあったように。そういう包括的な視点というか、それを大学も含めて提示するということが大事で、ただ単にキリスト教教育プラスアルファだけではなくて、総合的な中でキリスト教をどう位置づけるのか、それがやはり重要な点だと思いますね。意識していかなければいけないことです。その辺り、西原先生の話の中であらためて、聖書だけではない、伝統と理性というね、これはある意味重要なことではないかと。少しだけ補足させていただくと、面白いのが、大学の起源として、神学部・医学部・法学部を挙げて、精神的痛み、靈的痛み、まさにスピリチュアル・ペインが神学部になってきたと。それが非常に面白いなと思って。ではそのスピリチュアル・ペイン、精神的な靈的な痛みを、キリスト教学校としてどこが担うのか。それはやはり大学の礼拝だけではないと思いますし、大学全体が、どうこういう痛みに対して、靈的な必要性に応えていくか、非常に大事なことだと思いますね。

松田：規矩前学長が、神学部構想を打ち出した時には、欧米の伝統的大学では神学部が中心的な学部であることが念頭にあり、それが形を変えてインスティテュートになっていった訳で、この流れは非常に大事にしたいと思います。まだ、日本の文化の中で、インスティテュートとかリベラルアーツの大切さとか、よく理解されていない部分が今なおあります。でも、私が教育同盟の各校の理事長、学長にリーフレットを配ったら、多くの方々が「先生、よくここまで来ましたね」と感心されたが、学内で配っても、あまりピンと来ていない、その有難みが伝わっていないと感じています。でもそのスピリチュアル・ペインということにも、ある意味では、何かつながる。次のボランティアセンターもそうですし、もっと包括的なものにつながっていくような、方向付けが若い世代で今後の課題として議論していくって欲しいと願っています。

豊川：やはり人間理解として包括的でないと。精神・肉体・靈性をどうケアしていくのか、キリスト教主義の学校でなければできないことを。やはりそこが強みではないかと思うし、150年に向けて考えていきたいですね。

伊藤：キリスト教の人間理解ということが、聖書の授業で語られると思うのですけれども、例えばこども園

とか、小学校も高学年になれば語られるかもしれないけれども、こども園とかでは全然語られないと思うのですね。「人間ってこうなんだよ」なんて言わない。でも、あの場で、キリスト教の人間理解は体現されていて、経験されていて、それが親にもだんだん伝わっていく。それは、そこにいる教職員が、毎日の祈りの中で、そこで語られるみ言葉の中で、自分自身を振り返ったり、足りなかったなどと、そういうところから、こう人間理解ということが自然と皆さんで一致していって、今は難しい時代なので本当にいろいろな子がいる中で、今までの人間観を全部崩していくようなところがある。その中でできるということが考えられれば、それは、こども園でできるのならば、私は大学まで、どこの学校でも本当はできることなのではないかと。それを誰が担うかということを議論することが求められているのかなと思ったので。今回私は理性のところで、痛みのところで、ああそうだなと思ったのですけれども、今どんどんクリスチャンが減っているのですよね。クリスチャン教員も減っていて。クリスチャン教員が減っている中で、誰が担うの、といった時に、誰がそのリーダーシップをとるの、といった時に、こども園はクリスチャンばかりでなくともできている。だんだん減っているけれどもできている。規模が小さいこともあるし、お互いに語り合う機会が、「この子こうだよね」という一人の園児について語り合うことがあるのかな。大学、上になればなるほどそれが難しくなって、その辺のところのリーダーシップとか、中心になるのがどこになるべきなのか、明確になるのが一つ大切なのかな、と思いますけれども、如何でしょうか。それが小さい学校の時には、なっていた。ベンネット先生、テンネー先生、坂田祐先生。坂田祐先生のことは未だにつながっているけれども、それは「人になれ 奉任せよ」を創った人だから、ということでなっているけれども、本当にその精神を伝えているのか、という。今日そういう話をちょっとしたのですね、礼拝で。そうすると、いろいろな反応があって面白かったです。「聞いたことがある言葉だ」「身近だ」そういう反応が多かったのですが、「やっと腑に落ちた」というものがあったし、「考えてみようかと思った」とか。どこがそれを担うのか、牧師やチャプレンだけではちょっとしんどいな、と思うし、どうなんでしょうか。

熊田：そういう牧師先生とか、神学を勉強されている先生とかに、任せるだけではないのかな、と思っています。隠れクリスチャンの先生も、私には言ってくれる「教会に行っていたのだ、よかった」とか。でもク

リスチャンの先生でなくても、アメリカでインクルーシブ教育の実践家で勉強してきた先生などは、教会に行ったことはショッちゅうあったし、例えば私みたいな小さな人間が、教育学部の室の木の礼拝堂で当番をいただいた時など、意外と学部の先生方など「熊田が何を話すのだろう」といって、聴きに来てくださることが多くて。でもそれでも心静まる時間であったり、聖書のここを私は大事にしているということだけでも、伝えることができれば嬉しいことですし、もしかしたら先生方も、クリスチャンじゃなかったとしても、何かそういう精神を一緒にしていくというか、信仰は持たれていない先生であったとしても、私たちはイエス様の姿を、学生教育を実践していくように、そういう共通理解というか、共通感覚と言えばよいのでしょうか、何か抑え込み、こうしなさい、ではなくそれを大事にしていけたらいいなと、今は思いました。

伊藤：内藤先生、如何ですか。

内藤：松田先生のこの間のお話を聴いたときに、やはり戦争前の、文部省とのいろいろな問題があったときに、恩典が受けられなくなってしまって、キリスト教教育にこだわった、ということを改めて伺いましたけれども、その時に無くなってしまう、また縮小していく道を辿っていたかもしれないこの関東学院が、とても規模的に大きくなっていた、カレッジになっていったということが、そのことは恵みがあったのですが、特に大学、上の方の年齢になるほど大変だ、ということを実感するところです。西原先生のお話だと、関東学院にとってのライフラインは何なのか、考えてみたら如何でしょうか、というお話がありましたが、同じように西原先生のお言葉を借りるのならば、手仕事的に人になるという、その言葉がすごく印象に残って、やはり大学の教育の中でも、いろいろな形で手仕事的に、その人の人格にちゃんと寄り添ってということがあるのだけれども、なかなかイメージしにくいけれども。よく小山学長がおっしゃっていますけれども、この学院にはキリスト教の雰囲気があることがまず大事で、それをどうやって実現していくのかも難しい思いながらも、キリスト教の祈りとか、キリスト教の香りのようなものが現れていくような取り組みが、私のこのような立場で働いているものとして、考えて、これから大事にしていきたいと思いながら、今の話を聞いておりました。

伊藤：ありがとうございます。ライフラインという言

葉は、たしかにありましたね。キリスト教大学は「危険な場」だという。あれは私すごく大学に期待をして、ライフラインのところを守りながら、ライフラインを守るがゆえに危険な場になるのかな、という風に思ったのですが、その辺りは如何でしたか。

豊川：危険な場、というのは非常に面白い。学問の場なので、やはり批判的精神がないと学問は成り立ちませんから。そういう批判的精神に対して、キリスト教学またキリスト教がどういう風に応えることができるのか。それはやはり大学の場なので、大学で教えるキリスト教の質が問われているので、批判的精神に対してどう応えていくか。またそれに対して、どう新しい真理探究をともにしていくのか。それは何か、こうだ、という教条主義的なことを教えるのではなくて、まさに諸学との対話の中で、キリスト教自身が問われている。それはまさに危険な場になりうる。これはネガティブではなく非常に積極的な、まさに冒險ということですよね。そうでなければ大学は真理探究の場にならいかないので、これは非常に、重要な、危険な場というのいい意味で。



松田：日本の精神風土は、非常に同化的で、長いものに巻かれろというか、コンサバティブな、そして新しいことに対するアレルギーみたいな形で、それを拒否するというか、それを嫌うという。でもやはり、危険な場に飛び込んでいく勇気と姿勢を持つときに、世界が広がっていくという。だからやはりそこで、飛び込んでいくという勇気を持つことの大切さ。それはやはり自分が変わることに対してオープンであり、自己相対化ということですね。他者との対話ができる度量というか、姿勢を持たないと。対話ができないということは、自分を守って、自分は変わらないということで、その人の前に自分をさらけ出すことができない訳で、やはり対話できるというのは、その人と出会って、話しをすることによって自分が変わりうるという自分であり続ける、それが自己探求ということですね。

伊藤：私はそのライフラインがしっかりとしていれば、危険な場になりうると思うのですけれども、ライフラインがしっかりとしていない時代は、いろいろな場所が危険な場になりえないと思っています。批判をすると怖いし、同調しかない、圧力しかない。でもライフラインがしっかりとしている、学校における一番大切なものはここで、ここから揺らぐことがない、といえば、イエスほど危険な人はいなかった訳で、そう思えば、私はその両方が、今やっとその140年のところで、あの最初のところにもいろいろあったと思うのですけれども、常に危険なこともあったのだけれども、それを乗り切ったのは、やはりそのライフラインというのがあったのかと思って。そこで今高井先生からメッセージをいただいたので、ご紹介いたしますね。創立記念礼拝の感想ということなのですけれども。

高井：「冒險する心」が働く根底には、神ご自身が道を示してくださいることへの信頼があった、というところが一番心に残った。それが、信仰によって歩んだ信仰の先達たちに共通していたところであろう。それに見習いたい。冒險する心が試されたのは、戦時中でも礼拝の火を絶やさなかった学院にとってチャレンジとなったのは、2020年のコロナ禍における対面礼拝の中止のときもあったであろう。あのとき、祈りながら、まだよくわからないオンラインという手段に打って出て、礼拝の中止を最短にすることもできたのも、「新たなものに触れることで自分も新しくされた」経験であったと思う。「人になれ 奉仕せよ」という校訓は、いま、私と内藤先生が担当するオープンキャンパスでの大学紹介に先立つ礼拝において語られ、多くの学生予備軍その保護者に建学の精神の意味が語られていることは、現在の新しい大学の試みとして特筆すべきであろう。大学が推進する社会連携教育も、この建学の精神が根底にあってこそ生きるものであります。

伊藤：高井先生からメッセージをいただいたて、今ここで話していたことがひとつ整って、言われたような気がしたのです。それで私は、キリスト教学校は常に危険な場である、キリスト教は危険だな、と常に思っていて、だから訓令12号も出てくるし、それくらい潰さないと、根強く強さを持っている宗教だと思われているのだろうと。搖るがない真理を持っているということが強いのかな、と思っていて、それがこの学校の中で語られ続けたことが、関東学院の140周年につながったのかな、と思ったりもするのです。細々の時代もあったと思うのです。苦しい時代もあっただろうし、今ちょっと礼拝が苦しいなと思っている学校もな

い訳ではないですよね、学院の中にも。だけれどもそれをうまく、なんとか乗り切ろうとしていろいろな人が力を尽くして、そういうところにいくのではないかと思いました。西原先生のお話の中で、インパクトのあったのが、聖書を読むこととは、「言葉を食べる」という話だったのですけれども、聖書を読むことと安直につなげたくないのですけれども、危険な本を読む、危険な言葉を食べる、ということではないか、その辺りについては先生方如何でしたでしょうか。これは自分自身も問われるし、自分自身の行っている教育も問われるというか、言葉だったと思うのですが、如何でしたでしょうか。本当は伝統のところで、イエス・キリストが心臓だとすると、その血を伝えるのが伝統、とおっしゃったのでしょうか。何かそんなことをおっしゃっていて、やはり中心にイエス・キリストがいて、伝統はそのイエス・キリストを伝えるためにあるので、伝統主義に陥ってはいけない、といわれて。私は関東学院には伝統主義というものはあまり感じていなくて、どうですか。関東学院はあまり時代の中で、伝統ということをそんなに言わないですね。メソジストの青山学院のようなところは、結構メソジストであるということを言いますよね。でも、あまり伝統主義ということはないけれども、脈々とライフラインとなってきた伝統の部分ということでは、あるのかなと思ったりしています。

松田：バプテストということで言えば、やはり自覚的信仰告白に基づく、という、自覚性、自分自身、自己理解とか、自分を知るとか、「人になれ 奉仕せよ」という前に自分を知る必要がある。自分は誰か、何者か、ということを知る時に、カルヴァンが言った「神を知ること」と「自分を知ること」とは、裏表の関係だという。神の前での自分を知る、ということからを踏まえた上での自己理解。だから「人になれ」というのも、「新生」というのをバプテストでは言うのですけれども、リボーン（reborn）とかボーンアゲイン（born-again）という形で。だから、生まれながらの素の人間は、自己中心的で独りよがりだけれども、神との出会いによって、自分がどんなにちっぽけな罪深い存在かということに気づいた時に、神との和解の出来事が主イエス・キリストの十字架によって起こるという。それは新しくされる、新生というバプテストの基本的な人間理解と結び付く事柄です。だから「人になれ」というのは、肉体的に大きくなるのではなくて、やはり神様と出会うことによって新しくされる、という意味での人になるということが、基本にあるのです。そうすると、「道徳」の教科書には立派な人た

ちを登場させ「あなたたちもあの人たちのように立派になりなさい」と言われてもできるはずがない。だから自己理解があって、その自分が神と出会い、新しくされることによって、他者に仕えていく人間へと導かれていく、という。ボーンアゲインというか、それが「人になれ 奉仕せよ」ということになるのです。そのことは西原先生が言われた事柄とつながっています。パウロが、ピリピ人への手紙の3章12節で「私がすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。」探求していることは、まだ完全にはなりえない、相対的な存在だけれども、それにもかかわらず、神の守りの中で育つていって、探求し続ける、こうした考え方と結びつくと思います。

伊藤：新しい生き方が生まれる、という言葉はすごくバプテストっぽく、新しくされる、ということも。それ自身がもしかすると次の150周年につながっていく中での私たちの課題なのかなと、今先生の言葉を聞いて思いました。如何でしょうか、新しい生き方とは、結構難しいのではないかと思うのです。今までと自分が変わるので、破られなければいけないし。

松田：それが冒険することなのですね。危険な場所に身を投じるというか。

伊藤：それを怖がらないで。やはり。

豊川：教会で語られる神学的な言葉、ではない言葉に翻訳していくというか、これは意識的に大切にしなければならないことで、最初から神学的用語で語られる事、いや、私はクリスチャンではないので関係ありません、となってしまうので、いかにキリスト教的な言葉を、誰にでもわかる、キリスト教信仰を共有していない者にも、職員の人たちにもどうそれを翻訳して伝えていくのか。そこを意識しないと、やはりキリスト教教育は成り立たないし、それはまた大切なことで、それでは生まれ変わる、新生ということをどういう風に言葉を変えて、福音の真理は薄めずに、相対化する訳ではないけれども、本質というものを伝える伝え方というものを、礼拝でもチャペルでも絶えず問われていますけれど。

松田：日本のキリスト教は、やはりインテリ層にアプローチした。その体質は今でも変わっていないですね。

伊藤：どちらかというと、大きい教団はそうだったと思うのですけれども、小さいグループは庶民じゃないですか。そこは庶民に通じる言葉と、社会を生きる人に必要な言葉に行ったんじゃないかなと思う。だからさつき豊川先生がおっしゃった翻訳すべき言葉、私たちの言葉の食べ方が、聖書の言葉の食べ方が、そのままそのどういう形で次の人々に語られるか、というところが大きく問われていて、その最後のところでは、一人ひとりの存在を大切にするキリスト教学校、ということを言っていたように、私たちはキリストの言葉を食べれば、インテリジェンスだけを摂ろうと思っても、最後は自分が打ちのめされて、こんなに弱い私をも愛してくださったイエス・キリストに、皆さんを出会わせたいという思いから、ただそれだけを伝える。そういうものに変えられていく、というのがリボーン(reborn)で、先生がどこかでおっしゃっていた、新しい人になる、メタノイア(metanoia)のところはこちらにもありましたね。悔い改めのところもありましたけれども、そういうところでこの「人になれ 奉仕せよ」は、かなりすごい言葉なんだろう、と思うのですよね。坂田先生自身が東京学院で学んでいるというか、やはり最初のところからのものも受けた上での言葉だったから、坂田先生自身もこの「人になれ 奉仕せよ」は自分で考えたのではなく、受けた教育、与えられた愛、育てられた信仰の中で、この言葉が出てきたのではないかと思うと、初めからこの言葉は関東学院の礎に実はあって、その言葉を私たちは食べて、どうですかね次に、という話が、私たち教職員に求められているのではないかと思います。

豊川：新渡戸稻造の薰陶が大きいですよ。新渡戸は「諸君は何かをしようとする前に、何であらねばならないかを考えよ。to do の前に to be の問題を考えよ」という言いますよね。ですから to do というのが「奉仕せよ」に当てはまるし、to be の問題、これが「人になれ」に当てはまるのですね。新渡戸の愛弟子の河井道とか南原繁とかが教育基本法を作っていくのです。そういう意味で、1947年の教育基本法、まさにどういう人を作っていくのか、真理と平和を希求する人間を育成する、それは教育の力に俟つ、と言われていた。その精神はキリスト教的な、前面には出でていませんけれども、背景にはキリスト教的な教育というか、新渡戸、河井道、南原繁、という流れの中で「人になれ 奉仕せよ」ということがあると思うですよ。

松田：1947年ですか。その新教育基本法を考えて中心的な役割を果たしたのがクリスチャンだったのです

ね。

豊川：そうですね。だから南原繁が委員長というか。いろいろな委員会があって、教育の理念と目的を論じる第1特別委員会というのがあって、その唯一の女性委員が河井道であって、ほかに務台理作とかそうそしたる人がいるのですけれども、河井道もキリスト者の、恵泉の学園長として呼ばれて、かなり毅然とした発言をするのですね。平和の大切さであるとか、教育基本法の中で、理念として、人格の完成はどうかとか、議論されるのですけれども、最終的にはその文言に落ち着くのだけれども、河井などはその委員会の中で「人格は完成できるとは思いません。人格は向上しますが」みたいな。人格についても委員会の中で論じているし、他者との協働といったことも論じて、そういったことが教育基本法の文言に入って来るのですよ。それが非常に面白いですね。それが2006年に変えられてしまう。その精神というのは、「人になれ 奉仕せよ」というキリスト教の人格教育は大切なものがある。

松田：3年か4年くらい前に、学院の事務職員の中で中心的な人が、教職員研修会で本質的な勉強をしたい人もいるので、学院長、大事な建学の精神とか「人になれ 奉仕せよ」を学ぼう、と提言してくれた人がいました。それで3年前にオンデマンドで講演会を実施して、1,200回ほどの視聴回数があり、特に大学の教員たちが、見てくれて、積極的なコメントを寄せてきました。それで今度は東北学院の学長、院長の大西先生をお呼びし、大西先生と松田が対談したり、こうしたテーマを中心に据えて、今度は西原先生を呼ぼうとか、私が学院長2期目になって本筋に入ってきたところはあるのではないか。真正面から問題を提起すれば、聴いてくれて、大事なことかなと思ってくれているのかなと。

豊川：問題提起し続けることは重要なことなのかもしれません。

松田：あまり高圧的にならない。「こんな問題だけれども、どうかな」といった感じで。多分、タブー化せずにそうした問題を真摯に考えるアプローチも必要なのかな。

伊藤：表に出てこないものでも脈々と育つものと、表に出てくるものと、両方あると思うのですけれども。もうそろそろまとめの時間に入りたいのですが、関東

学院は結局、歴史を見てくる中で、大切にしてきているものは守られて来ているけれども、いつそれが転ぶかわからない危機的な状況が、今も、これから先もある。という中で、教育に携わる者、それから学校と一緒に作ってくださる職員の方々も、実はこの学校はキリスト教学校として、そしてその学校は今日語られたような、ただ信仰していればいいのではなくて、きちんと学問をして。それから自分のことだけではなくて、人の痛みも理解して、そういう中で、この学校を卒業した生徒たちはそれを社会において、活躍することができる人になる、ということが、私たちの学校の今後の使命ということで、だいたい締めてしまおうかな、と思ったのですが、よろしいでしょうか。みなさんありがとうございました。

(記録：学院史資料室事務室)

関東学院ボランティアセンターの設立に向けて

学院宗教センター事務課 田中 義浩

関東学院は、初代院長坂田祐先生が掲げられた校訓「人になれ 奉仕せよ」の精神を、これまでの教育及び研究活動の継承と更なる発展により具現化に取り組んでまいりました。そして、今年度創立140周年を迎えたが、今後、学院としてキリスト教教育、人間教育を行うにあたり、ボランティア活動を支援する体制をつくり、社会の中で園児、児童、生徒、学生を育成していくことを目指し、校訓の更なる具現化を果たしていくことができればと考えております。

については、その周年にふさわしい事業のひとつとして、関東学院ボランティアセンターを設立すべく、学院长、学院宗教主任を主体とした「ボランティアセンター（仮称）立ち上げに関する打ち合わせ」の会議を行い、検討を始めております。

さて、本学院では、ボランティアセンターの設立について、過去にも検討を進めた経緯があります。検討のはじまりは、10年以上遡ることとなります。

2011年3月に東日本大震災が起きましたが、その際、関東学院大学は、災害ボランティアの派遣を行いました。ボランティアセンターがないなか、学生、教職員有志の協力により、宮城県の現地においてボランティア活動が展開されました。

その災害ボランティア活動をきっかけに、恒常にボランティア活動を展開するためにとりまとめていくような役割を果たす組織体の必要性を痛感することとなります。その頃、全国各地の大学、キリスト教学校でボランティアセンター設置の機運が高まりつつありました。さっそく、2012年度に、ボランティア活動を定着化できるようボランティアセンターの設立に向けて動き始めることとなります。

まず、2012年度に「学院改革推進5ヵ年計画支援事業」として「ボランティアセンター設立」事業が採択され、2013年度にワーキンググループを設置し準備を開始します。ワーキンググループでは、ボランティアセンターとしての業務に関わる資料収集、大学の学生団体のボランティア活動状況、大学で実施しているボランティア活動の内容把握、他大学におけるボランティアセンターの活動調査を行うこととなりました。

他大学の活動については、3大学を視察しました。各大学とも地域のボランティア活動の紹介・情報提供、学内のボランティア団体の情報集約・発信などの活動を中心に行っており、そのためにボランティア

コーディネーターの必要性がわかりました。

その後、検討を重ね、関東学院大学ボランティアセンターの設置に向け「関東学院大学ボランティアセンター規程」（案）が策定されるまで進められました。

このたびの「関東学院ボランティアセンター」の設立に向けては、過去にワーキンググループを立ち上げ検討してきたことを基盤としながら、新たな考え方も踏まえて方向性を検討しております。

まずは、校訓「人になれ 奉仕せよ」を具現化することを第一に考え、「人になれ」としてキリスト教教育、「奉仕せよ」としてボランティア活動を「教育の一環」として行っていくこととして、園児、児童、生徒、学生を社会の中で育成していくために支援する役割を担うボランティアセンターを学院に構築することを考えました。

そして、ボランティアセンターの役割として、サービス・ラーニング、災害ボランティア派遣ではなく、まずは、こども園から大学に身近なボランティア活動を情報収集し紹介する機能を備えるものとし、徐々に活動を広げていくことができればと考えております。

園児、児童、生徒、学生が関わることのできるボランティアはさまざまなものがあります。例えば、環境に関わるボランティアとして清掃活動、福祉に関わるボランティアとして社会福祉施設への訪問、スポーツ・文化活動に関わるボランティアとして各種活動の運営補助、教育に関わるボランティアとして子どもたちとの交流、地域に関わるボランティアとしてお祭りなどの運営補助などがあり、これらは身近に関わることができ、そして、園児、児童、生徒、学生の参加が求められるボランティアです。その他、例えば、手話の学習、地域活動の講演などボランティアに関わる各種講座の開催を行うなどにより、ボランティア活動への意識向上につなげられます。

私見ではありますが、いずれの活動も社会への貢献であり、ボランティアに参加した一人ひとりが、社会の一員として、人のために、そして社会のために貢献できることは何かということを熟考できるような関東学院としての教育を実践できるものと考えております。

関東学院の校訓「人になれ 奉仕せよ」をさらに具現化していくこととして、園児、児童、生徒、学生の育成を目指した教育のためのボランティア活動を広げていけるよう検討を進めていくことを考えております。

六浦こども園設立10周年記念事業 これまでの10年、そしてこれから

関東学院六浦こども園 園長 鈴木 直江

2013年4月1日新園舎が完成、場所も移転し長い歴史のある幼稚園から「幼保連携型認定こども園関東学院六浦こども園」という新たな歴史の1ページを開きました。乳幼児（0歳6か月～6歳の子どもたち）の生活の場、子育て支援の場としての役割を担い、多くの子どもたちや保護者、先生たちと共に未知の世界に船出したのです。どのような荒波が襲ってくるのかわからないままで、私たちはイエス様が共にいてくださる事を信じて「六浦こども園」という舟を漕ぎ出していきました。



2013年 こども園として開園当初の園庭

子どもたちと生活をする中で園の環境は、少しずつ変わっていきました。大きく変化したのは園庭です。初めは、何もない平らな土地でしたが、そこに大きな山や小さな山を作り高低差を感じる環境になりました。また、畑やビオトープを作り植樹をして、虫や魚、花や実など自然に触れられる環境になりました。



2014年 園庭の奥と手前に山畑やビオトープ

そして、その改造には「子どもたちが自分の持っている力を發揮できる環境やアート（感じる心や表し）が生まれるアトリエ・空間が子どもたちの育ちを支える大事な力になる」という思いを共有したお父さんの会の保護者と先生たちが一緒にになって取り組みました。先駆的な環境の園に一緒に見学研修に行き、その園の子どもたちの姿や考え方から多くを学び、六浦こども園でできることを共に考え合っていくことができたのです。それからは毎年、お父さんの会の保護者と一緒に子どもたちの遊ぶ姿や活動する様子から、子どもの育ちに必要な、またふさわしい環境作りに取り組むことができています。



2016年 中央に山と段々砂場、一本橋



2017年 お父さんの会の保護者と話し合い

こども園になる時、「多様性」という言葉を意識して使い、「多様性を受け取って○○」と保護者の方た

ちに話していたことを思い出します。ところが、実際にこども園として動き始めると「多様性」の本当の意味を理解していない事を思い知らされることになりました。例えば、行事の日時や内容などを決める時、手紙やご案内を書く時などに今までとは違った配慮が必要だという事はわかっていても足りないところが多々あったのです。様々なことに思いが及ばない自分の足りなさを痛感し、「子どものために」という事だけでは動いていかない現実に、子どもも保護者も大切にしていく事の難しさを感じました。



2023年 スウェーデンの民族楽器演奏

10年経った今でも足りなさを感じていますが、少しずつ様々な状況を加味して検討した内容を保護者の方にお伝えできるようになってきました。また、それを保護者の方たちが受けとめて理解しようとしてくださることに助けられています。

2019年1月、新型コロナ感染症という未だかつてない大きな試練がやってきました。人と関わり合うことで広がっていくという特長は、乳幼児の育ちにどれほど多くの影響を与えたことでしょう。マスク越しでの会話や密集を避け間隔をあけて行う集まり、握手をやめ触れ合いを最小限に……など、子どもに必要不可欠な育ちの要素がどんどん削がれていきました。

ただ、何もわからず不安な情報が蔓延する中でそれを打ち消す確信はなく、六浦こども園も大人はマスクを着用し食事は間隔をあけるなどの対応を余儀なくされていきました。保護者や先生たちも巻き込まれ、大きな荒波に飲まれそうになった時、私たちは必死になつて神さまの御手にしがみついていたのです。「感染したことが悪いのでも感染した人が悪いのでもなく、この病が悪いのです」と何度も保護者に手紙を書き、伝えていたことを覚えています。また、そのことを保護者の方たちが賛同してくださって誹謗中傷などが多く、乗り越えられたことを本当に感謝しています。



2023年 木々の中に園庭アトリエ



2023年 中央に山、一本橋、やぐら、ブランコ

す。現在も換気と手洗いの施行や体調の変化を見逃さずお休みをしていただく事のお願いは続いています。

これまで先生たちと試行錯誤する中で「変えてはならないものと変えていくもの」を見極める機会に幾度となく出合いました。そして、その度に心が折れそうになり、いったいどうしたらよいだろうかと迷いましたが、先生たちと知恵を出し合い、何を大事にするのかを繰り返し話し合うことで、先生たちが思いを共有できたことはこれからも六浦こども園の財産となっていくでしょう。

六浦こども園が変えてはならないものは、保育の土台にある「子ども一人ひとりをありのまま受けとめ、人として尊重する」キリスト教保育です。それは神さまから私たちに託された大切な宝物である子どもたちが安心して自分を表す事ができ、他人と関わり合う中で一人の人として大切にされる事です。私たちは、一人ひとりの育ちに必要な支えをしていく事、そのための環境を整える事をこれからも大切にしていきたいと願っています。

2023年4月1日、六浦こども園は設立10年目を迎えることができました。

ようやく新型コロナ感染症が落ち着き出し、社会的な状況（人との関わりや行動範囲）なども少しづつ回復し始めました。コロナ禍の4年間、色々と試行錯誤してきた私たちは、園生活を元に戻すのではなく、新たに創り出そう！と動き出しました。

行事や活動の取り組みは、その内容を吟味し、集団の大きさや組み合わせ、場所など選択肢を増やして検討するようになりました。また、外部からのゲストも受け入れる方向で考え、子どもたちにとって活動や体験の広がりや豊かさを大事にする事にしました。

また、そのような中で見えてきたのは「今の子どもたち」「今の保護者」でした。私たちがより良いと思う事を一方的に決めていくのではなく、今まで以上に保護者の方の声に耳を傾けることを大切にしようと思いました。それは、新型コロナ禍、園と家庭の相互理解と協力がなくては前に進めなかったからです。「共に園を創っていく」というスタンスで歩んでいこう！また、保護者や地域の方々に認められ、必要とされる六浦こども園になりたい！という新たな願いを持って歩きました。

子育て講演会を参加型講演会にしてみる事や地域の



2023年 ちびっこ夏祭り（地域に呼びかけて）



2023年 ポリグロットシアター ペーパープラネット

未就園児親子対象に「ちびっこ夏祭り」を開催する事など、今までにはなかった取り組みを始めました。参加してくださった方たちの声を聴いて、これからも新しいことに挑戦していこうと先生たちとあれこれと構想を練っています。

「関東学院六浦こども園設立10周年記念礼拝イベント」の準備は、2023年5月の教務会から始まり、日時を2024年1月27日（土）場所を関東学院大学八景キャンパス SCC ベンネットホールと決めました。

7月の教務会ではホームカミングデー（1、2年前からの懸案事項）の第1回目を設立10周年記念行事として開くことにしました。この10年間に六浦こども園を卒立って行った卒業生（小学1年生～高校1年生）を招いて、一緒に礼拝を捧げ、その後懐かしいこども園に立ち寄ってもらおうと考えたのです。



コンサート

会の規模はあまり大きくせず、在園児を中心にしてこども園に関わりのある方や支えてくださっている学院の方をお招きする事にしました。そして記念品はこども園に在籍していたことが思い出になるようなプレゼントをしたいと考え、六浦こども園のカバンの生地で作った円形に園章が描かれているキーホルダーを贈ることにしました。それと並行してプログラムや案内状、当日の役割分担などが話し合われていきました。

10月の教務会ではイベントの内容を検討しました。以前から園とつながりのある近隣のこどもホスピス「うみとそらのおうち」からご紹介された、NPO法人「あっちこっち」さんに子どもたちが喜ぶような音楽



記念品のキーホルダー

劇か楽しめるコンサートを企画してほしいと依頼しました。11月早々にお返事をいただき、出演者や演目がスムーズに決まり、会場の下見や打ち合わせが終わっていました。

第1回目のホームカミングデーの準備も進められ、卒業生約800枚（約80名×10年）にご案内はがきを送りました。その返事はグーグルフォームで集約し、日々増えていく参加者の懐かしい名前に先生たちは、喜びの笑顔になりました。高校1年生になった卒業生の参加申し込みに私たちは感謝と励ましを受けたのです。「卒業生の声を聴きたいね」という私たちの願いからホームカミングデーの礼拝の中で数名の卒業生に六浦こども園のことや思い出に残っていることなどを話してほしいと依頼する事となりました。どの人にしてもらおうかと悩んだ末、小学生の部・中学生の部・高校生の部から1名ずつ3名の方にお願いすることにしました。私からお電話をして本人に直接お願いしたのですが、突然で驚きながらも快く承諾してもらうことができ、当日にお会いする事が益々楽しみになりました。

12月の教務会では最終確認を行い、先生たちと「設立10周年記念礼拝イベント」「第1回ホームカミングデー」の当日を緊張と歓びと希望を持って待っていました。

午前の部は在園児とご家族、来賓の方々、先生たちで礼拝とコンサートを行いました。記念礼拝の中で学院長先生から聖書のお話を、理事長先生からお祝いの言葉をいただきました。そして年長クラスの子どもたちが舞台に上がって賛美をして「みんなでお祝いしましょう！」という雰囲気の中で、神さまに感謝を捧げることができました。子どもたちは、大きな会場に少し驚いていたようでしたが、だんだんと雰囲気に馴染んでいきコンサートでは身体を動かして踊っていました。

保護者の方たちも学院の中にある園のすばらしさを感じて六浦こども園の10年の歩みを喜んでくださっていました。ここまで10年間、神さまが守り導いてくださった事に感謝を捧げることができ、これからも神



年長クラスの子どもたちが大好きな賛美を！



参加してくれた多くの卒業生



懐かしい園庭でひと遊び

さまと一緒に歩んでいきますようにと心から祈りました。

午後の部は第1回ホームカミングデーを多くの卒業生と開きました。久しぶりに会う先生や友だちに初めは照れながら、時間が経つにつれてこども園時代の自分に戻っていくようでした。大きくなった子どもたちの姿に私たちは心から感謝し励まされました。スピーチの中でどの人も泥だんごづくりに触れ、その事を今も自分の中の宝物のように大切にしている事を知り、私たちも乳幼児期の体験の意味深さに改めて保育の中で大切にしてきた事を子どもたちから「それでいいんだよ」と言われたように感じました。

SCC ベンネットホールでの礼拝を終えて、子どもたちに「六浦こども園に寄って帰りたい人は行きますよ」と先生たちが呼びかけるとほとんどの卒業生が六浦こども園に立ち寄ってくれました。

懐かしい写真や卒業ムービーを見て、保育室や園庭を往復もして過ごす卒業生の姿に「この場所を大事に想ってくれているのだな」と感じ、いつでも訪ねることができる卒業生の人たちの「心のふるさと」になりました。六浦こども園のこれからの歩みも神さまと共にありますようにと心から祈ります。インマヌエル！ハレルヤ！

◆「坂田記念館」リーフレットが新しくなりました

三春台校地にあります坂田記念館を紹介するリーフレットが、新しくなりました。これは関東学院同窓会からのご寄付によるものです。ご覧いただきまして、坂田記念館も見学してみてください。

◆学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆さんに学院に関係する資料・情報の寄贈をお願いしております。

お手元にあります学生時代のお写真や学院のパンフレット、式典、学祭の配布物など、大切な記録かと思いますが、学院中資料の収集にご協力いただけますよう、お願ひいたします。資料のご提供については当室までご連絡ください。

E-mail:archives@kanto-gakuin.ac.jp 学院史資料室事務室

2024年4月に、学院史資料室事務室に配属なりました。どうぞよろしくお願いいいたします。

さて、「沼にハマる」という言い方が昨今はやっていますが、当室に配属されて初めて『新編 恩寵の生涯』を通読しまして、じわじわ沼にハマっております。坂田祐という先生の生涯は、まさに南原繁の序文にある通り、「本書の著者のごとき、波乱と苦難に満ちた生涯は稀であろう」といえます。この書を（業務として!!）読めるといふ事をもって、この部署に配属されてよかったですと思つております。学院史について、まだまだ勉強が足りませんが、読める資料は何でも読破しようと、意気込んでおります。

時まさに関東学院創立140周年にあたりまして、その節目のニュース・レターの編集作業に携わることができることに、何か大いなる意思を感じております。

学院史資料室事務室 逸見 義顯

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニューズ・レター 第28号

発行日 2025（令和7）年3月1日

発行人 関東学院 学院長 松田 和憲

編 集 関東学院 学院史資料室事務室

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL.045-786-7066 FAX.045-786-2932



こちら（学校法人関東学院 HP）から
本誌のバックナンバーが閲覧できます。